WASON

女學雜誌

第二百十二號目次

社説　男女青年論(浮れ男、淫れ女)
論説　日本文學の統一(天眞居士)
批評　外山正一氏の美術論●商權回復の實手段●山形相公の開化史
雜録　家庭の風色(千松閣女史)●春と秋と孰れか善き●齊の桓公、武藏坊辨慶●一席夜話●死期の青年●太田榮子の傳(天民生)●きよめぬ庭●スチーリングの澹泊●ハワードの死●家の手わざ
小説　野邊遊び
寄書　女學生出校して後學びたりし學科の何れが尤も實効を奏せしや附たり出世後學窗を顧みて教科書に於ける感覺如何●女醫學生●間一髪●常に無き女生(長竹正德)
開書　今日に至り御社鴻恩に聊か謝ふ(筑東井蛙女)●交詢
時事　還御を迎へ奉る●學頭皆空々●貧民救助●起てよ、姉妹●復歸●調和に贊成す●調和に反對す●調和の調和●廢娼記事●通信
女報　看護婦養成委員●京都女子師範學校●モリス氏●スピンチル氏貧民救助●婦人矯風會●新聞女記者養生●其他三件

"The Heavens declare the glory of God; and the firmament Shewth his haniwork." David.

家庭之風色　中島とし子

男女青年論(二)　浮れ男、淫れ女

天眞居士　日本文學の統一

五月十日發兌　第二百十二號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 212. 10th, May, 1890.

EDITORIAL :—The Young Man and the Young Woman (II).

LEADING ARTICLES :—Conformation of Japanese Literature.

CRITICAL NOTES :—Prof. Toyama's Article on Japanese Pictorial Art. The Restoration of Mercantile Rights. Count Yamagata's Opinion on the Subject of Natural Progress.

MISCELLANEOUS :—Contrast in Homes. The Spring or the Autumn? A Chinese and a Japanese Hero. The Old Man's Tale. The Young Man's Death. Miss Ei Ota. Steeling's Simplicity. Death of Howard. The House-Wife.

NOVEL.

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百十一號目次

社説　少年男女論　○哲理人情

論説　家政學は女子教育の要素なり

批評　女學雜誌、目下の女子教育法○教育普及の順序、女子の責任○文學者としての福澤翁○大器果して世に容れられざる乎○朝と云へる詩○軍紳商撤

雜錄　胸中塵なし○偽りの歌○愛は嬰ろとなし○懸賞答文○宮川靜井孃のこと(佐藤雄能)○嗚呼浮世○和歌の浦波(池袋清風)○きよめぬ庭○大人とならんには○文字と馬鹿もの(井上次郎)○家の手わざ

小説　野邊あそび

寄書　文學史の第一着は出たり(透谷)○敢て申す(破月子)○文明と詩歌との關係に就き女學雜誌記者に質す

閑書　我儘せぬと(佐藤てつ)○交詢

時事　擾擾さわぎ○愛國公黨○養の河原○町奉行と町人○文部大臣○モリス夫人貴婦人社會に基督教を傳道す○女界新客○通信○廢娼記事

女報　女子の洋行○横濱禁酒會○伊豫今治○今昔の差

Women in Japan.

A letter has been received from the Ladies Society in Osaka which was started two years ago for charitable purposes. It gives us the particulars of the organization of an Orphan Asylum through the efforts of the members. Last autumn they opened a bazaar for the sale of articles that they had made and realized several hundred yen one half of which they contributed to the church and with the other half rented a small house for the rescue of the castaway orphans. An old lady noted for her devoted Christian character soon took charge of the work and it has since been considerably enlarged. A large concert to be opened this month for its benefit will also assist the institution and it promises to be one of which the Christian church will be proud.

When Mrs Leavitt spoke at the "Kosei Kwan" on the subject of Temperance and asked her audience to sign the pledge there were only five persons who stood up in response, but at Miss H. Kermamis coming 448 in Tokyo alone odded their names as advocates of the Temperance cause. Is not this a sure sign of the national progress in moral sentiments?

The annual Conference of the "Tokyo Haishō Kwai" (Anti prostitution Association,) is to meet on the 17 of this month; and the general conference of similar association in the whole Empire will meet in Tokyo on the 26. Preparations are now going on for addressing a large concourse on the same subject.

On the 5 of this month all the proprietors of public houses met together to consult on the subject of self-protection.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百十二號 明治二十三年五月十日發兌

社説

男女青年論

二○ 浮れ男、淫れ女

男女交際の一點より之を考ふれば、今の青年に三つの品あることを認たむべし。其の良からぬ望みを以て相ひ交はるものは三種の中の下等なるものなり。其の望み不良なるにあらねど、考への足らざるによりて失敗するものは三種の中の中等なるものなり。其望み極めて善良なり斯るが故に其の望みを満足すべき程の方便なきに苦しみ、遂に果敢なくも失望落膽するか、若くは中ば放念して止を得ず不本意の交はりに安んずるものあり、之を三種の中の上等なるものとす。所云る其の上中なるものも元と決して眞の上中なるにあらねど、只だ尤とも卑しむべきの下等なるものに比へて、暫らく假りに品等を定め置くもの也。

世は樣々の劇塲にして、所作の變化極まりなきを見るなり、素袍烏帽子も復活するとあり、儒敎神道も反り咲するとあり、左れば今日に於て青年の學問に復古を形どらんとするもの、亦もやチラホラと世に散見するは、別けて驚ろくべきの事にあらず。則はち男書生の中には切りに支那日本の古文學を調べ、唐詩撰万葉集を暗誦し、幼學便覽八重垣集等を繰り反して、天地鬼神を泣かしむるの明吟を呻り出でんと心掛るものあり、此類の書生の言ふ所ろを聞けば、今の日本は海鼠水母の住宅にして氣骨ある男子は一人もあるなし、朝日に香ふ大和だましひは、洋夷の臭氣に毒せられて殆んど消えなんとす、大八洲國の運命は、今日國粹をつなぐと否なとに由りて活死長滅すべしと云ふ、語氣頗ぶる壯んにして聞くに心地よきの説なり。」又女書生の中にも、之に似たるの族あり、平素しとやかにして物一つ言ふだに得堪えぬべう見ゆるを以て女の心得とし、但だ率と云ふことのあらんとき、懷劍を拔きてグザと貫ぬけよと敎へらる、良人に仕へて至貞なるべし、彼れ何如ほどに我まゝなるとも必らず辛棒すべし、縫針洗濯は女藝中第一のものなり、姑舅親戚への交際は心得の中の肝腎のものなり、而して香、花、茶、女禮、をどり、琴、武藝は、必らず一と通りを學び置くべしと云ふ。此れ純然たる古風の女子敎育にして而して現今いたく之が復古を主張するものあり、然るに之に贊成するものも亦た尠からず、神主、儒者、舊先生、村夫子、旦那、庄屋、御幣かつぎの面々は之が熱心

なる後推にして、之に縁故あるの女生は則はち皆な如此きの教育を蒙むるものなり。

夫れ此類の心得方は、今の時勢に際して適否果して如何んと問ふに、蓋し此れ多少の議論を要するの者なり、吾人の如きは全く之を斥くることをせず、而も亦た全く之に賛成するものにもあらず、然れども此の男女青年論を叙するに當りては、此一類の青年を全く度外に置くべし、何んとなれば此の一類の青年は、男女直ちに相見ることを以て奇しかるの事となし、七才席を同ふせず、十五才言語を交へず、二十才相ひ向ひ見ざるを以て禮と定め、なか〳〵に近く交際する如きこと決して之れ有るなし、其婚するや先づ仲人を定め、見會を爲し、吉日を撰びて結納を交はし、更に大吉日を撰びて三々九度の盃を交はし、老母介女それ〴〵に附添ひて儀式の面倒なること一と方ならず、惣べて是れ元祿以后の制度にして、寸分も輕忽にせず、男女の相ひ定むるも單へに父母の指命に據る、たへて我儘なる申條を言ひ立ることなし、規律整然、筆法嚴乎として、家々容易に其格を破るべきにあらざる也、故に如此き男女青年の事は一に其父兄に任す、其の交際法につきて吾人が吻を容るヽの餘地あるべきにあらさる也。

左れば只だ、概むね文明流の教育を受くるの青年に付きて考ふるに、感心なるものも多けれども、不感心なるものも亦格外に多きなり、彼の男女交際上、下等に位ひする青年の如きに至りては、實に見るだに忌まはしく、且つ氣の毒なる心地のせらるヽなり。

其男子は型の如く下宿屋に寄宿して或る私立學校に通學するか、若くは何々と云へる官の大中學校に入りて其寄宿舍に混居するものなり、其學問の仕方につきては暫らく之を評せず、先づ既に一日の科業を畢りたる后ありとせよ、此時に於て彼等が皺を伸すの工夫は果して何事なりや、字引を枕にして駄馬の如く長く轉がり、「好男子」とか「佳人君」とか「何姫」とか、「粹」とか云へる小説雜書を仰のけ乍らに戀讀し、精神恍惚として頭腦殆んど溶けるに至る、讀了りて放り出し、起直りて臨席の書生に語る所を聞けば、………亦言ふに忍びざるの言なり、的は美なりとか、彼は醜なりとか、先日の遊は殘り惜しかりしとか、明日の土曜は千秋の如しとか、殆ど解しがたく而も聞がたきの醜語を放つあり、其外に出るや、若き婦人に出會ときは、正面より直視したることなく、左りとて傍より窃み見ざることなく、見て毒笑せざることなく、若し同伴者あ

らば何事をか語り合はずと云ふことなし。彼等には夫婦の相い伴ふを見ても既に淸からずに感ぜらるゝ也、夫婦一愛兒を誘ふて同行すと云ふ天地間極美の現象を見ても、彼等は先づ細君の顏を見、次に亭主の顏を見て、則はち「野郞」と微嘲するの外か、彼の愛兒には心づかざる也。音樂を聞ても高尙絕大なる音象には靈を動かさゝるなり。畫を見ても閑靜なる田舍家の景色は味はいなきなり。昆虫の中にては蝶々が菜の花に飛ぶ所ろ、禽鳥の中にては鴛鴦が双々水に浮ぶ所ろ、動物にては貂が姬に戲むるゝ所ろ、人物にては美人の畫か、遊女藝者の像か、もしくは二人同伴の圖にあらずば滿足せざる也。彼等つねに不潔なる女を相手にせり、故に女と談すときには是非とも不潔なることを話すべきものと心得、不潔なることを一つ二つ交ゆるはたとへば胡椒を西洋料理に散らすが如く、何如なる女性に對しても必らず爲すべきのお世辭なりとし、之を以て甚はだ味はいあるの禮法と心得るなり。彼等が理想には男子が「我物」と思ふの佳人を得、佳人が「我つま」と思ふの良人を得、終日痴話を爲し、一生グニャリ〳〵として戲むれ樂しむより、愉快なること決して無しと思ふにあるなり。故に其の標語は、ほれる、好く、可愛がる、甘へる、浮山ける、の四つを以て積極とし、すねる、ぢれる、うらむ、辛棒する、放る、の五つを以て消極とす。夫れ此類の男子が平素女性を見るの眼とは大畧斯の如きなり、彼等が女子を求るの望み亦た知るべし、其求め得て安んずるの樂しみ亦知るべし、其の樂しみ厭くとき妻に對するの處置何如があらんかは亦た確知するを得べし、あゝ秋の天を以て比ふべきの人間なりとせば、蓋し此類男書生の成の果てぞ即ち之なるべし。

然りと云へども、之れ必らずしも男子のみの惡しきにはあらず、抑そも彼等が氣儘なる情慾を愛し反つて此を良き事の樣にして好み嫁ぎたるの女子も亦た宜しからぬものなり。凡そ此類の女生は、其の女學校に在るの頃より既に心得方を誤まり居る也、彼女は必らずしも勉强せざるにあらず、然れども其の何故に勉强する心持になりたるかを尋ぬるときは、彼女は嘗て洋服を着け靴を穿ちボンチットを冠むりたる或る女敎師の風采を見たり、其風采何如にも淡にして美なりき、其應接を聞きたり、英語を挿はさみ何如にも凜々しかりき、其の人より持なさるゝを見たり、先生〳〵と崇められて何如にもエラ相に見えたり、妾わも若し那の如くならんにはと云へること、是れ彼女が發心の初めにてある也、之を父母に賴めば父

母も亦た同樣なる名譽心を懷けり、隣の梅孃は卒業して某博士に娶られ、横町の竹の舍女史は小說を著わして大臣に懸想せられたり、今日の出世は即はち教育にありと云ふの理を悟り得たる也、此に於てか、彼女は急に束髮に結び、紫の布呂敷に包み、下駄は成るべく高く音のするを求め、近所近邊に廣告して堂々女學校に通學することとなれり。彼女は試驗に於て落第することの必らずしも苦しきにはあらず、只だ朋輩に笑わるゝことと、先生に好かれぬことが非常に苦しきを以て、日々の暗誦と下讀には全力を盡して先づ可なりに用意するなり、然れども教場に於ても二三度は頭を撫で帶を摩り襟を合せ、且つ切りに先生の顏色を窺ふ。讀んで面白き所ろに至れば辛ふじて書物を熟視す、其他は見るが如く見ざるが如く恥るが如く出者派るが如し、時に極めて靜かなるときは其の睡氣の兆せしと知るべし。若し夫れ小說書にても講讀するの時間に於ては、勇氣日比に十倍し、殊に人情の講釋の所ろに至れば、耳を聳だて後りへを高めて聽聞する也。斯て日和の日には必らず出校し、雨降りの日には毎度欠席す、又た時々衣服を變ゆることに注意し、人の裝ほひに着目し、少しの事を仰山らしく言ひ、役員の前には恥かし氣に愼しみ、友人同士の仲には恐るべきの大言を吐く。密かに其言ふ所ろを聞けば教師の評判なり、教師の評判に二種あり、其學力につきて不平を言ふものは尙ほ賴母しきものなり、其の衣服、顏色、樣姿、言語等につきて彼此と言ふものは殆んど度しがたきものと知るべし、而して此に敍する所ろの族は即はち度しがたきの類にして、彼女が、教師の言葉づかひを評し、顏色を評し、遂に髮の解き方、衣服の着方、アバタの多少、靴の光の有り無し、爪の伸び樣の長し短しに迄で言ひ及ぼすに至つては、最早や教育學上餘程の難症となれるものなり。彼女は亦た教科書よりも小說を好み、繪入新聞を好み、特に其續き物を愛讀す、故に學理の研究には子供の如く、世間の事には老女の如き經驗を有す。又常に鏡に向ひて笑ひ方を稽古し、其笑方によりて始終笑わざることなし、人と話しするときには其風采の清からんよりも其談話の實の有んよりも、先づ此の笑ひ方の甘く行はるべきや否やに痛く掛念する也。其話し細くして長し而かも詮じ詰むるときは一箇の道理を殘さず、悉とく蒸發すべきもの也。常に化粧して眞物を現わさゞらんとするが故に、人は如何なるときも其の眞物を見ると難し、其顏の化粧のみにあらず、言語、應接、樣姿、立居振舞悉く化粧あり、

あゝ此の化粧に欺かるゝの人々は愍れむべきなる哉。彼女何の故に化粧する乎、彼女は盖し、西洋人と話しが出來、普通の學力を有し、交際に拔目なき、所謂る美にして粋なるの當世才子を、生命よりも愛好するもの也、もし世に愛好を量るの權衡あらば、女子が物を好くの好き方は遙かに男子よりも重量なることを知るべし、其の好き方非常なり、故に如何にもして如此き才子の愛を買はんことを欲す、此に於てか、笑ひも、聲音も、樣姿も、目つきも、皆な此目的を達する化粧とはなる也、吾人嘗て云ふ、昔しの嫁入道具は箱入と云ふことなり、今の嫁入のたしなみは一と通りの女學を心得ると云ふこと也、故に今日の女學生の十分の三四は一種のお化粧の爲に學問する者にあらざるはなしと、盖し之を云ふ也。

嗚呼如此き女生こそ實に愍れむべきものなれ、彼女すでに學校に入れり、若し能く學ぶときは汝が書籍は悉とく汝ぢに獨立自尊の重んずべきことを教へざることなし、汝が教師は日夜涙を流して汝ぢが眞面目にならんことを祈る也、汝ぢが玉の飾りよりも、綾羅の装ほひよりも、其心中に藏めたる眞の女德は天下に比ぶものなきの重寶なり、然るに汝ぢかへて之を出さず、只だ土と胡粉と織物とを以て身の飾りとなす、而して今の万事は汝等に自由を與へ、又汝等が權を重からしめんとするに關はらず、汝等は特更に好みて卑きに就き、敢て小學の昔しに反りて人の奴隷たらんとす、汝等人形の如くに玩愛さるゝを以て滿足するか、顏色と樣姿とを買はるゝによりて其の魂しひをも賣らんとする乎、嗚呼汝等が身躰に附着したる文明の教育は今や泣て汝等が一身より離れんとはする也。

夫れ如此き青年男女の一生は最早言ふ迄もなき也、何如なる小説家に寫さしむるも之を同樣に記載すべし、徒らの愛は浮雲よりも果敢なし、情冷め浮氣散ずるときはたゞ己れに一の厄介物の縛ばられ居ることを見とむる也、去らんか朋友の手前を如何にせん、共に居らんか此の氣儘もの此の浮かれもの此の不親切ものを何如にせん、噫、斷てり。一はいよ〳〵放蕩す、一は父母に嚴責せられ極難極冷の家に再嫁す、學樓の理想は宛から前世の夢の如し。

昔より國家の滅亡する原因を察するに多くは姫妾の事に由る、夏桀は妹喜を以て滅び、商紂は妲妃を以て滅び、衛靈は南子を以て滅び、夫差は西施を以て滅び、唐高は武氏を以て滅び、明皇は貴妃を以て滅ぶ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

論説

日本文學の統一

天真居士

世は刈菰のそれならねど、日本文學の世界は今や戰國の時代にてありけり、七國强を爭ひ、六雄八將共に中原の鹿を逐ふ、健筆世を壓する勇者も流行の風荒くして文壇の榮華露のひぬ間の蕣花よりも短かく、雄文時に高き名將も進歩の潮疾くして一代の聲擧胡蝶の夢よりも果敢なし、されば幾多の文學者は世に驅り來て又驅り去られ、日本文學の野は已に定態なく、日本文學の國土は復た統紀なし、憶ふは終に是れ誰が家の天下ならん、試に首を回らして看一看し來れば、經國美談が一世の美談となりし時もあり、佳人の奇遇が時好に奇遇せし頃もあり、雪中の梅さへ時に其香高く、阿蘇山下の才子新文体の旗を飃して八十州を靡かするあれば、紉川の詩人亦其多情なる筆花を粧して天の一方に顯はるゝあり、春の屋の春も來り、美妙子の花も咲き、紅葉郎の紅葉の錦うら珍らしき秋山の色を染め出せば、摩訶不思議なる靈光は落て露伴の露の貫き住めぬ玉と散り、竹の舍の竹は輕妙の風を弄して婆娑たり、淸癯なる思軒の梅は半窓の月下に馥郁たり、温雅ある森氏の林は春の若葉の色淺くして藹乎たり、和調、漢調、獨調、英調、言文一致の格、雅俗折衷の躰、馬琴走り、西鶴飛び、レッシングや、ゲーテーや、ミルトンや、ユーゴーや、ダンテ、ツルゲーチフ、サッカレー、アヂソンより、エリオット女史も、マコレー卿も、スペンサアも、セクスピヤも、皆夫〱々に己が信者を有し、紛々復紜々として、千調萬躰雲の如く霞の如く簇り出で、恰も世界萬國を縮圖せしが如く、又春夏秋冬一時に來て萬木千草一齊に榮枯するに似たり、實に今日の文學界程榮へ易くして而して衰へ易きはなく、實に今日の文學者程壽命の短き者はあらず、若し氣樂なる眼光を以て之を看去りたらんには、豈復た一世の奇觀ならずや。

嗚呼、紛々たり擾々たり日本今日の文學界、知らず我が文學界は何が故に此の如くそれ紛々又擾々たるや、知らず我が文學界は終に統一するの期はなきや、抑々統一するの必要はなきや、將た統一する事は能はざるか、抑々何れの時か何れの人か能く之を統一し得べき者なるか。

顧ふに是れ社交的政治的日本が夫の一たび浦賀の海口に寄せ來りし黒船の波に其怠流を突破攪擾し去られたると共に、我が文學の海も亦其捲き來り捲き去る歐潮の溢入に遭着し端なく斯は柏楊碎散して此千萬點の泡沫を亂飛せしめし者ならん

其頃者頓に其れが風潮を激迅にし、恰も是れ水流如箭萬雷吼の勢を呈せしめたる所以の者は、豈夫の批評の術が一二年來著しく發達し流行したるの結果にこれ由らざるなきを得んや然りかの批評の術固より或は人を誣ひ世を誣ゆる事なきにあらず、然れども其時弊を已に曲れるに矯め、世好を清く高きに導き、作者をして向ふ所を知らしめ、顧慮する所あらしむるの功效は亦決して少々にはあらず、要するに其の批評の効力に由ると、歐潮怒入の結果に出づると若しくは何等の原因に基するとを問はず、我が日本今日の文學界が榮へ易くして又衰へ易く、一轉一變究極するの所以なきは、夫の文學者の力量が足らざる爲めのみならで、文學界の地平線が低き爲めのみならで、進歩の疾きなり、上達の速かなるなり、我が社會の境遇が之を驅ることの其れ烈なるなり、即ち當途の文學者の爲めには氣の毒なれども日本將來の文學の爲めには實に一大慶賀す可きの事なり。

今其所以を再言せんか爰に我が文學界が和文のみなりと假定せよ、此の時に當て能く和學流の所長を集めて大成する者あらば是れ固より和文學界の王たる可し、然れども更に漢躰に於て一長を顯はす者出るに至らば和文學界の王は其全文學界の王たる所以をば失せん、爰に別に和調漢調を打て一丸とし、其れが雜躰に於て能く其萃を拔く者ありとせば是亦其躰に於ての萃ならん、然れども更にこゝに歐風の吹き入る事あらば是亦同く文界の統一者たるを得ず、蓋し其の和文學界に王たる者の力量が當時に足らざるにはあらで、別に漢躰の版圖開たるなり、和漢雜躰に主人たる者の歐文學の侵入に遭て亦其統一者たるの資格を失ひし者も同じ、さればにや今日の文學者が其壽命の永からざるは、其國語文格の其れ多種なるに由るなり、各國の文躰語調が突入し來るの其れ急速に其れ頻煩なるに由るなり、即ち爲に能く一躰に王たるも他躰にも亦王ありて一消一長究る處のなきなり、況して近頃頓みに發達し來りたる批評の術が傍より其流勢を早むるをや、焉くんぞ能く長へに文界の春色を獨領し得べき、然れども日本文學の統一は到底なし得可からざるの業にはあらざるなり、何となれば現在日本にあらゆる及び其應に入り來る可き各語各躰を能く一坩鍋の中に渾然融化せしめ得て、其最も恰好に最も自然に最も適當なる躰調を集成して之に王たらば、是れ即ち日本文學の統一者たる者なればなり、而して夫のセクスピヤが一萬五千の異語を用ゐて幾多の悲劇を作りたるを見れば、否

な現に我が和漢雜体文に於ても自ら其れが粹を集め得て一派の特長ある文字をなし得るを見れば、何ぞ更に和漢歐各体を一器中に鎔解し得て、更に粲乎又燗乎たる新日本の新文學界を開拓し得られざるの理あらんや、而して其和漢歐各体を一器中に鎔解同化せしめ得るの日は、其れが各文學我が社會に或る度迄入り來りたる日ならざるべからず、洋來各種の文明潮が其の度迄我が社會に侵潤したるの日ならざれば能はじ、夫れ時勢は能く詩人を作る者あり、然れども詩人も亦能く時勢を作る、されば吾人は日本今日の時勢が能く日本今日に適當せる文學者を作り、又日本文學界の統一せらる可き時勢來らば亦能く其れに相應せる即ち日本文學界の統一者たる文學者が作り出さる可きを信ずると共に、其能く時勢を作る所の文學者其人に向て、一日も早く我が在來の文明と歐米新入の文明とをして相平均するに至るの時勢を作り我が文學と彼れ洋來の文學とをして能く融鎔同化し得る時勢を作りし後早く我が文學界の統一者を作り出たされんことを望むなり、東洋のセクスピヤを作り出だされん事を望むなり。

而して東洋のセクスピヤたる者は即ち日本文學の統一者たらん者は、かの文体聲調に於て獨り和漢歐を打て一丸となし上るのみを以ては足りとせず、實に和漢歐の文明を打て一丸とし、眞理を心となし、和漢歐文明の粹美を骨肉となし、而して和漢歐混化的の文躰を皮膚衣裳となして美妙の幕裡より出で來らしめざる可からず、然り若し爾かく世界的文明の材料に由りて人類詩學的性情の妙理を發揮し日本國民の進路を指授し社會の嚮導者として時勢の代表者として和漢歐各躰化成の新文衣を被つて出現せば、日本の文學は實に之に由て始て統一せらるべし、日本の國勢は實に之に由て大に定まるべし、且つ夫れ其の能く一時を動かす者は能く其の一時に稱贊せられ、其の能く一世を動かす者は亦能く其の一世に嘆美せらる、若しかの能く國家の大勢を百世に制し人民の性好を萬代に導く者あらば其の人こそは則ち能く百世萬代に記臆せられて永く、文化の父母たらん、然らは詩人の責任豈小ならんや、其身固より現在過去の時勢に由て作らるゝにもせよ、其身亦能く時勢を將來に作り得べしとせば、世の文學者たる者其自重せよ、其自愛せよ、抑々其大活眼を開て社會の大勢を觀破し去り、常に世の巧妙なる寫眞師となり、怜悧なる嚮導者となり、公平なる批評家、忠實なる看護婦となり、嚴肅なる敎師、和樂なる朋友、優麗なる樂人となりて、夫の國民の性情を

高潔清鮮の域に導き、家國の前途を安全富榮の港灣に向はしむる事を勉めよ、好しや文學世界の大半を領有せる小說の如き、其の目的は或は唯に人の娛樂に供するのみとするも或ひは別に廣き目的のあるありとするも、若し其の時勢に媚び世好に諂ひ希ふ所は只其當時の好みに投ずるにあるが如くあらば、其小說の果して其れか當時に愛せらるゝと否と益せると害せるとは暫らく置き、日進月步する社會は今日の嗜好明日は已に其一段を進めて世また之を顧みる者無きに至らん、畢竟するに世の三文小說が忽ちにして廢れ忽ちにして棄てらるゝ者は職として世の追從者とあつて先驅者とならざるにこれ由らずんばあらざるなり。

語を寄す眞成に日本文學の爲めに憂ふる者よ、日本のセクスピヤを作り、ゲーテーを作り、シルレルを作り、又ミルトンを作らんと欲する者よ、又自ら爾かくならんと冀ふ者よ、汝の活眼を張り、又汝の力量を養ひ、卓焉として舊套外に超立して、幽妙なる玄理に富贍なる文明の骨肉を添へ麗淸なる文辭の衣を被らしめたるかの尊ときエンヂエルを出し、我が社會民人を高潔なる優美なる和樂なる幸福ある樂苑に導かしめよ、然らば則ちこの紛々又紜々たる日本の文學界は、汝が手汝が宗の手の版圖に入らずして亦何處にか去らん、我が文學界は常に久しく汝を待てり、待ちこがれて寧ろぢれたり、こがれてぢれて歌ふて曰く

來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに
　やくやもしほの身もこがれつゝ

批評

外山正一氏の美術論

外山博士「日本繪畫の未來」の說甚はだ好し、吾人は只だ之を「將來」と思はまく欲するのみ。所謂る、當時の人の最も注意する所の事物を畫題とすべき事、苟くも畫人の感情を動かしたるものに非ずんば畫題となすまじき事、單に感能的に存せず一躍思想的の畫題を採るべき事。三段の論法皆な悉とく可なり、吾人は啻に之を賛成するのみならず兼てより之を主張し又兼てより其「將來」の日あらんヿを祈り且つ待つもの也、頼朝の墓、秀吉の死床、虐待の馬、親子外人同胞の異情、投兒の親、妻を載するの眞人等、皆な美にして面白きの畫題とあるべし、吾人は今の畫家が着々此邊にも用意あらんヿを望むもの也。

近來の名文章

其の末段に云く

予輩は頃日鎌倉に於て予輩を甚だ感動せしめたるものを見たり僅かに數尺の高さに過ぎざる一個の墓標なり墓標は全く蔦の纏ふ所となりて恰も蔦を以て作りたるもの丶如き觀あるものなり冷たき石も寒からざるの觀あるものなり老朽せる墓石もつねに青々たるかたちを存し居るなり苔を以つて掩はれたる臺石の時代のふるきことを徵するに足るものなり臺石に沿ふて其周圍にやさしき姿を成して咲き聯ねたる紫花地丁は妙なる首を振りて心有りげに點頭くぞ哀れなる後ろには大なる常盤木あり茂れる枝葉は墓を衛りて雨露の爲めに犯さしめざるあり後ろは山の側面あり墓を護して動かざるの勢あり遠く向ふを望めば松の並木の間より遙に見ゆる水の面あり見ゆるは僅かに一片の水面に過ぎざると雖も是れぞ則ち渺茫として殆んど際限なき太平洋に外ならざるなり數尺の墓標後ろには動かざる山の扣ゆるあり前には毫塵の障碍もあらざるなり此は是れ何ん人の墓なるぞ伊豆の片隅より起りて旭將軍を粟津が原に亡ぼし先づ源氏の一統を遂げ平家を西海に沈めて終に海內を一統したる源賴朝の墓あり……

純乎たる英文法にして、作語斬新奇拔、近來稀れに見るの名句ありとす。

商權回復の實手段

時事翁が此說法は議論敢て新奇なるにあらねど、言廻し何如にも面白く、例の如く巧妙に近し、結局、外國人が日本を想像して一の蓬萊島となし、此より出張したる商人を篤信して喜んで取引を爲すべしとの一段は、人情を穿つ至妙の言なり願くは商人諸君之を一篇の妙文章なりとし看過せず、深く覺悟して此の怪事業に當られんとを勸告す。

山縣相公の開化史

昔し櫻癡氏は、薩長は勤王に初まりしものなるを以て亦た勤王に於て終るべしと論じたるとあり、能くトボケて人を責むるものと云ふべし、鼎軒亦之を駁し、薩長にして若し勤王なるか、薩長の時あつて互ひに爭ふは即はち勤王を攻たるもの也と、其のトボケのいよ〳〵巧みなるものと云ふべし。

凡そ維新以來の變遷を察するものは、政局の進化が素と廟堂の預算の如くなりしと誤解すると勿れ、或者は國會を嫌ひし也、或者は藤原氏を慕ひし也、然れども大勢遂に之を驅つ

て彼等をして止を得ず其進向に伏せしめたる也、故に維新后の開化實史を考ふる者は深く此の活象に注意せざる可らず、悲しひ哉班固の筆よく之を穿つことを得ず、近世の史を叙するもの大抵其要項を得ざる也、但だ山縣相公は十數年の昔しに於て既に能く之を穿ちたるものか、其の末松氏に寄するの書中に於て如此く言へり、

明治十二年乃ち今日の政躰に迄進行せんとは誰人の夢想にも嘗て期せざる所ろあり（是等生の親しく見聞する處）今ま老兄の論旨に由て推究するときは當時既に一定不拔の廟算ありて此の治功を成すと云ふ者の如し、是れ歴史上の理論のみ、若し百歳の后より之を見る時は兄の論旨の如く必らず當時に英雄豪傑其人ありて策を帷幄に運らし勝を千里に決し事を未然に照見し勢を一時に揣摩し豫じめ立憲の政躰をも期して以て巍々の治功を成就せりと言はん也、今ま之を演劇に譬へんに看客の外に批判するものと樂家の内に評議するものとは自ら親疎の差別なきに非ず、生の言ふ所ろは悉く樂屋内幕の工夫議案にして兄の議するが如く表面皮相歴史上の理論にては無之候。

と、實に然り、修史家の好材料は此文に超ゆるもの少也。

雜録

家屋の風色

千松閣女史寄

一日某友を訪はんとて玄關にいたりたのみますの言いまだ了らざるや否脊肥短かくして愛らしき下婢來りこれが取次を爲す固より奥座しきと玄關迄は遠く隔てざる如くあれどその取次の速かなるはいと快よし座しきの入口に妻君出迎へり互の挨拶甚だ重からずして各席に就けり一隅に紫檀の小机上に今挿みしといふ色合是は花でなく雜木の嫩芽瓶は純白の石燒き余は妻君に向ひ哀れらしき殘花より一層ですして瓶も淡泊で「へー先刻それを斷るとき切角芽を出したものをと氣の毒に思ひましたか花の名代なれは本人も滿足だろうと存じますその上あなたのお目にとまつていよ〳〵滿足でよろしく其瓶は昨日散歩の節古道具屋で買つたのですよ三錢五厘とはどうでしよう「マー驚きますしかし物品は主人公の風韻に化せられますから價にはよりませぬと是より種々のはなしを湧出し博覽會の品評衆議員候補の騷擾米價の騰貴並に日本新聞驥紳商檄及んで林遠利翁の耕作轉じて外山先生の廢娼演説而して其談話必しも合せす必しも離れす問答已むのときおく早午餐の報あり食室にいれば日本流の一机廣さ五六人を座せしむべし

食は一椀の露一皿の羹のみ給仕人は矢張以前のふとりてみしかき下婢にて妻君の手足の如く其行ふところ都て妻君の氣にいるもの、如く婢もまた妻君は一事一物おのれに任せて安んずる如きを滿足するもの、如くなり食するに語らずの孔敎も守り切れず折々は一言二言靜かなる語話もありて喫し了りぬ初この家に來りしより凡そ三時間全く利益と歡樂との境に往來していと去りがたき心地せり先方も言葉に言はざれど可成とゞめたき顏色なれど下午一時より他に約あるを以て遂に別れ更に約ある家にいたれり。

其二

到れば廿二三黎面の書生ゆき短かき衣物に赤鬼然たる兩手を露したるにも似ず黑塗に金泥の角切盆を出して名刺を請取り軈て與まりたる室に伴なはれたり卓子椅子の配布正しく大小花瓶五六大は九谷愛知の類小は水晶と珠玉各新奇の名花を挿め殊に白牡丹紅薔薇は色香兩ら莊麗朱か時針漸四隅に行き遍きころ煙草盆茶菓子悉く余が眼に据へられ茶煙草盆菓子等の職掌は各其持々を異にするもの、如し同じ下婢再ひとは來らずこれらの用意整ひたれど妻君出來らず余は心中思へり今日は約束にて來たる故妻君留守の筈はなし留守なれば左樣いふならんしかしあまりひまいるが如何の事かと考へてある中顯はれ來たは妻君あり余は顏を見るよりもご機げん樣との簡短なるあいさつはなか〳〵不調子にて先方のいろ〳〵彩ある言葉には最早答ふるところなし言葉の切目毎に凡そおじぎ六たび爲せしが勇氣何となく挫じけたるが漸く力を皷して與樣博覽會にお出遊はしたですか「イーへまだです」お庭の薔薇が綺麗です新芽のとき虫が付き易くしてお困りでせう「どうですか庭造がいゝようにするでしよう」およどうも立派な雞が私も七年程以前三十羽ばかりかひましたが何分彼等が喧譁を製御する事が出來なくて閉口いたしましたがしかし隨分たのしみなものです此間女學雜誌に家の手業と申題にて鳥の事が載てございますがなか〳〵面白こざいますへー雜誌おとりですかそれじやお讀み遊ばして「けれども鳥の事は氣が付きませんでした」このころ詩か歌かのたのしみがございますか「イーへどういたして私共には」英學は餘程お進み遊はして「モー廢めました」

余は餘程談話の製造にとりかゝりしかも宛も未熟の英語家の如く漸く一二言の外繼續せしむる能はざりしは必竟自分のはなし下手を咎むるの外無りし後は互に無言戒を守る如くなる

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

中杯盤の響き長き廊下より傳はり限りなきの珍味身邊を圍繞せりこれらを配置するの婢これ等を持運ぶの婢一〻妻君の顔いろを窺ひ暗にその意に適ふや否やを伺ふもの〻如し妻君心にすまざるところあれば枉て口を結ぶの景しき此景色は婢をして自から恐懼の念を起さしむるが如し余は此海山の美肉も雙眼眩せんとするの名器も終に心をたのしましめず却て三錢五厘の花瓶室を戀しく感ぜしめたり。

春と秋と孰れか善き

もみぢ
みどり　對話

春と秋と孰れか善きか、の問は、昔し樹木集に於て志賀の豊主が疑ひける以來、歌よみ風流者の仲には大ひなる疑題となれるなるべし。實に雪とけ風和ぎて一天青く万地紅きの春景色は、何如に世を厭ふの人なりとも見て自づからに戯むれずと云ふとなけん、左れど亦た葉落ち木獨立し、孤雁月に泣きて万象坐ろにさびしきの時には、何如にたわれたる男女と云へども、端なく自己の性靈に、思ひ到らざるとなるまじ、古しへの歌人は只だ春のにぎわしきと秋の紅葉とを比べたり、若し夫れ此の一事に付きて優劣を争わんとあらば、吾人は其の何れが勝を制するかを措いて顧みるとなけん、亦た其の何れが優れるかを得て定むるとなけん、春に會するときは春の美あり、秋に到るときは秋の味はいあり、

春秋に思ひ亂れてわき兼つ、時につけつゝうつる心は　貫之

たまゝ其の一と方を善しと決定するも、若し轉じて他の一と方に接するときは、ゆくりなく亦た思ひの變るとなり、

一かたの秋に心を寄しかど、花みる時は何れともなし　承香殿

左れば余は其何れの優れりとも定むるとなるまじ、たゞ人の生命の爲めに其何れか重んずべきやの一問につきては、太だ心を苦しむるもの也、世人若し春の花の下に嚴かなる心を抱き、秋のしめやかなる夜に現世を樂しむの心あるを得ば、日本は則はち褒むべきの國なるべし、但だ夫れ花の咲けるに笑ひそゞめき、酒飲み遊び戯むれて毫も慮ばかるとなく、天下を一の鹿鳴館として衆皆な狂るひ舞蹈するに於ては、

春は只だ花の一重に咲にけり、物の哀れは秋ぞ優れる

と警告するところ無くんばある可らず。

齊の桓公、武藏坊辨慶

玉堂

齊の桓公なりけん、野に出でゝそゞろありきするとき、郭侯の跡を思ふて農夫に問へらく、郭侯は何ゆえに亡びたると、農夫答ふ善を善とし惡を惡としたるが故也と、桓公怪しみて問ふ善を善とし惡を惡とするは人君の德にあらずやと、農夫

嘲けりて云く善を善として行ふ能はず惡を惡として去る能はざりしが故に亡びしのみと、嘯ふきて去る、桓公大に悟り歸りて管仲に告ぐ之れ知言にあらずやと、管仲云く君之を知言なりとして其知者を用ゆる能わず同じく是れ郭侯のみと。

又或る物語にて見たり、或る時大名中振舞の席にて辨慶の事物語に出でしよ、皆々辨慶の欲しさよと評判ありければ、末席より木下肥後守公定云ひ出でゝ曰く、イヤ其辨慶は少しも欲しく候はず、判官殿の料簡にあり候へば私の家來は殘らず武藏坊になり佐藤兄弟にあり申すべし、左ば何とぞ判官殿になり申したく、久しく心懸候へども未だ得なり申さずと云り。

此の二談極めて美なり、己が品徳を養ふに助けあること少なしとせず、時々思ひ出して自ら省みると也。

一席夜話（一）

山下石翁

理窟と人情

物事は經驗せぬと能くは分らぬもので、多年耳よタコの入るほどに聞たことでも、其場に臨んで其事に當る迄は頓と夢を見たやうに思ふて居るものです。私が若い時には父母から色々の事を敎わつたが、其時は「又たか」と思ふ斗りで少しも其のお話しに味が無つたが、段々年を取つて世の辛い甘いを嚙分けて見ると、一々昔しの敎へを思ひ出した。兎角若い時には年寄りの話しを馬鹿にするものだが、年寄は決して若いものゝやうに馬鹿では無い、必らず多少の經驗があるのだから能く其言ことを聞分けて見ると無限の益があるものだ。一躰お前方が學問だの理窟だのと言こと大層に珍重するが、其學問理窟は何にかと云ふと、つまり昔しからの學者が經驗したことを集めたものだらう、既に學問の上にも經驗が大切であるから人情の上にも亦同じやうに大切であるので、若し人情の經驗をした老人たちの言ふことを輕んずるやうでは、迚も又學問は出來ぬものだ。ダがまた年寄も惡るひので、年寄は人情の經驗こそあれ理窟の事は餘り知らないのだから、幾ら年が若くても文明の敎育を受けた今日の青年に及ぶ筈は無いです、ダカラ理窟などの事に至ると若いものゝ方が年寄なので、年寄の方が子供なので、即ち今の老人は今の少年から敎へを受る筈です、其代り人情の事に至ると少年には少しも經驗が無い、年寄はすでに一世の經驗を經たのであるから、此事に付ては若いものが謹んで聞かねば成らぬのです。物事の理窟は段々に進歩するが人情に至つては昔しも今も同じことです、昔し孔子ソクラットなどと云ふた人の理窟には今日から見ると多

くの間違ひがあるが、シェクスピアの淨瑠璃だの、詩經だの、万葉集などに出て居る人情は今の人情と同じことです、人情と云ふものは理窟のやうに時代で變ることの無いものだから、此事に付いては老人の經驗したことを其儘に聞て置いても間違ふことは少ないものだ。

ダカラ年寄は人情の經驗丈を話すが善い、生意氣に學問の事などは言わぬが善い、又若いものは年寄がヲカシナ理窟を言ふからとて、其人情のお話しまでを馬鹿にしては成らぬ、此の二つの區別は大切なことだが、今の老人も若いものも双方で心得違ひをして、テンデに怒つて居るのは可愛相なことだ。

夫れで之から、お前方に私が經驗した人情の事をお話しするから、能く聞いてお置なさい、一寸と聞くと詰らないことのやうであらうが、其處に大層の味があるものだ、一躰世の中の事は極く分り切つたことが、一番確かな道理なので、即はち一番大切なのです、一番大切だから誰にも分り切つて居るのだが、然しよく考へると矢張り其味を知らないのです。デスカヲ其邊の極平凡で得も言われない價値のある人情を追々お話しゝます。モウイヤダー、之はしたり失禮の事を言ふ、何んですと、居眠りをして汁粉を食べた夢を見た、ソンナ事ではまだ祖父の話しは分らないぞよ。

死期の青年

むらさき

唯だ一度母の面影見るなれば、と繰返へし〳〵叫ぶ聲す、船は波にゆられ〳〵て風は暴く水をば卷けり、水夫なる一人の青年帆木綿のいとせまき釣床に打臥したるが面は青み渡り目は曇れるが如く氣息もはや弱くなりぬ、彼れの傍には一盃の水を與ふる人なく、苦痛を慰むる友も非ず、されど苦しき呼吸の下に唯だ一度母の面影見るなればとの言葉は絶へず叫び居れり、一人の老水夫あり死なんとなせる若者の傍に居寄り何故に御身は苦しきうちに同じ言葉をくりかへし母を見んとはし賜ふぞ、安けく眠りに付き賜はずやと云はれて彼の青年は、たゆげなる息の下より答へて云ふ、吾が爲めに涙流して門出の時に、愛子よ今日が日迄は御身がために苦しき業も忍びたり、冬の霜夜に風邪ひかせじと我が上衣をも脱ぎて着せ、食僅なるその時は母は食べで御身に與へ、夜半に歸りの遅るゝ時は暗き山路を子故に迷ひ案じて尋ねに出でもせり、石投げすなよ、犬打つな、と叱り懲らせし事も多し、さるを今一人の母をふり捨てゝ遠き國へと出でゝ行く不孝の者と思へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ども、母は御身の健全を祈りて居らん、家を出でしのちはあたりに世話する人もあからん御身が死するその時に母が言葉を思ひ出づべし。(My son, when you come to die, you will remember this!)今ぞ知る我が身は既に死なんとするも息あるうちに唯一度母の面影見るあれば。青年は苦めり老人は慰めんとして慰むる能はず、可憐この青年死に臨んで始めて慈母を知れり、世に細精なる優愛を味ふの青年幾許かある、厚情ある婦人が愛情を眞に味ふの人幾許かある、嗚呼死に臨で曉る既に遲し。

太田榮子傳

天民生

太田榮子は肥前長崎に生る父某醫を業とす榮子幼にして而して英敏殆と成人の如し齡七歲一日父に誘はれて諏訪明神の祠に詣る此日會大祭四民雜踏遂に父と相失す時に惡習大に行はれ六七歲の童子を拐し鬻賣し以て其利を覩ものあり賊榮子の失するを覗ひ忽ち來りて榮子を拐し去らんとし乃ち詐きて曰く來れ汝に珍菓を與へん榮子應ぜず賊迫り携へ去らんとす榮子罵り應じ竊かに賊の隙を覗ひ砂塵を握し賊の兩眼に投ず賊狼狽榮子僅に逃る父其智謀の尋常ならざるを以て愛育殊に甚しく業の暇讀書を授く齡十有一二古今の史傳を解す父又た之れに綠竹管絃の技を習はしむ僅に賤餘綠竹管絃皆能く通ず時に世運漸く開け泰西諸邦の文化漸く我邦に行はる榮子乃ち父に請ふて曰く今や泰西諸邦の文學及び敎法の精且つ密なる巍然五洲に冠たり余渺然たる一女子と雖も聊か横文を學び廣く五洲の人情風俗を察し以て當世に爲すあらんとす幸に兒が不敏を捨てず名師を撰み兒をして之れを學ばしめんこと是れ兒が終世の願あり父大に其見の卓なるに感じ乃ち榮子の手を取り嘆て曰く善哉請や予亦夙に茲に見あり直に米人某に託し大に横文を學ばしむ榮子毅然綠竹管絃を投じ日夜精苦横文を學ぶこと殆ど三歲是に於て泰西諸邦の學士商賈及び敎法の道を傳ふるもの爭ひ來り長崎に寓す榮子益々其學を勵む又殆ど三歲學大に進み識大に長ず我邦未だ横文を解し瞽盲に通ずるもの殆ど希あり之れを以て傳譯商業皆其人を要す英人某榮子が能く横文を解し瞽盲に通ずるを聞き來り譯官たるを請ふ榮子曰く余學未だ進まず識未だ長ぜず今にして其請を聞かば學の大成何れの日を以てせん遂に應ぜず益和漢の經史を繙き泰西の哲理を味ひ孜々止まず適々米人某來り榮子を訪ひ談論數時乃ち榮子に謂て曰く予は敎法を廣むるを以て職と爲す願くは普く本邦に傳んとす聞く本邦亦敎法あり儒と曰ひ佛と曰ふ此敎たるや浸漬久しければ則ち本邦の人情慣習に適せるは論を待たずと雖も今より以往五洲交通愈甚たしければ則ち人情必變し風俗必す革まるは自然の勢あり然らば則ち敎法の道に至りても亦た一段の勢力あるにあらずんば能はず儒佛の敎たる我基督敎に比するに其勢力の強弱大小豈唯だに霄壤のみならんや榮子默然須臾ありて曰く然り余亦夙に茲に見あり意氣擢然相合す爾來大に之れが敎法を傳ふるに汲々産を投じ財を擲ち專ら之れが擴張を計る其の之れを說くや秀然たる眉目は誠實の氣に滿ち粹然たる容貌は正德の風に溢れ朗々たる癸聲は殆ど天音に異らず其風采を望む翳乎として恰も春風の樹木を育するが如し聽者敬禮を致せざるなし榮子又施與を好み人の困苦窮厄を聞く乃ち趨走之れを救ふ猶水に溺れ火に爛るゝものを救ふが如し偶盛夏熱する甚だし惡疫流行死するもの甚だ多し榮子乃ち父と倶に行き自ら藥餌を給す故に市人之れが爲めに榮子の恩惠を蒙るもの市中に遍くと云ふ安政二歲横濱に移り住し鋭意自ら卒へ敎法を說く側ら學舍を設け帷を下す諸生來り學ぶもの甚た多し文久元年二月病に罹り臥床旬餘起つ能はず諸生を集め端坐して曰く吾れ死す諸子去りて名師を撰み斯の學を勉め死む勿れ諸生其訣を悲み涕泣淋漓起つ能はず榮子亦た巾を濡す精神三び遂に瞑す天民子曰く卓あるかな榮子渺然たる一女子を以て夙に横文の學ばざる可らざる敎法の講ぜざる可らざるを察し斷然其の學ぶ所の綠竹管絃を棄て斷然之れに投ず宜哉吾邦方今文學敎法之れを泰西に取る榮子の見と異ることなし曷に曰く機を知るは其れ神榮子の謂なり而して幼時賊を避くる所に至りては實歐寄に優る數等千載の下人をして其風采を想望せしむ豈に世俗の企て及ぶ所ならんや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

きよめぬ庭

其十一

酒落齋主人

夜學の純張

門の構いかめしふ造りなし、玄關の廣さ家に相應しからず、高張提灯の紋、抱茗荷もいとおぼろげながら、襖の波に千鳥の花紋はわざやかなり、近頃換たるならむ、此邊のみ新あるは疊を汚さぬためのみにはあらじ、澁紙とか云へる物引延て、此が上には藥刻みの臺に、大小刀の刄の、中頃のみ甚く磨ぎ減したるを置けり。これぞ今の世にも數多かる、天保時代の愚夫愚婦の生命預る、冥醫仙機寸白老の家とこそしれ。讀み得らるやしらざれども、机の上には常も長機の傷寒論、金匱要略方、華陀の中藏經、皇甫謐の甲乙經、孫思邈の千金方等を始として、平城の皇帝が出雲の連廣貞、安倍の眞貞に勅して編しめられたる大同類聚方、我國の扁鵲と字名せられたる、丹波の雅忠がものしたる醫略抄の如きは、處せまきまで列べあれど、繙たるさまも見へず。いと博識らしき貌はすれども、雞舌香(丁子)を雞の舌と思ひて、藥取人待たせおきながら、庭の隅々家雞逐まわしたれど、捕へ得で、遂には此藥の中の一味には夕方まで得られぬまゝ、それ迄にとりに來よとて、藥取人返したる例さへありときゝぬ、そが藥室に到り見ば、數多の藥袋を、こと〴〵く天井に釣り下げたれば、此は風入よくする爲にや、又は鼠などに嚙れぬ爲にやとて、尋ねたるに、いなとよ、病の名得も解らず、いとゞ治療に苦しむことあるときは、此の藥の室に入り、三尺ほどの棒とりて、先づ神佛に祈請をかけ、此棒を振り廻し、それにて上より落ち來りたる藥こそ、彼の病の名得も解らぬ、病人に適するものなれとて、調合せやる爲ありと語りし。」

そが近き邊に住める若き者、先きつ頃より詩學ばんと思ひ、三重韵をくりならひけるが、入聲のところに、ふつくつきに平字なしと云ふことあるをわすれ、いかほど思ひ出さんとすれども、思ひ出すことならず、幸ひ日頃博識と稱らるゝ、仙機寸白老の住居近ければ、參りて問はばや、これぞ近き路ならむとて訪ね來りぬ。されば此者も、ふつくつきと云へることを覺へはべりて云ふやう、此三重韵のおくに、くづちかきに平字なしとやら申すことは、いかやうにくり候ぞと問はれ、寸白元よりかゝること知る可きに非らず、さりとて三重韵はどのこと知らずとては、日頃ふき鳴らしたる博識の名折れな

れば、こゝぞ常もの口調にて、ごまかすにしかずと思ひて、さて〳〵そなたはまだ、口角黄色なるくせに、なまこびにこびたることいはるゝものよ、ことに素人のくせとして、三重韻おぼへて、人に癲癇の藥あはせやらんと、思はるゝにやと云ひて、追ひ返したることもありき。

或日のことありき、親き友の、しばし會ざるが入來りて、其方は近き頃久しふ見へざりしが、色さへ青きを見ば、病などに犯されしや、乃木伊とりが乃木伊となりては、職業柄はづかしからずやと云に。いやとよ、此頃は晝夜學文をはげみ、夜も夜すがら純帳の中にて、讀書怠りなしと云ふ。それはいと奇特のことなれ、ことに純帳の中にて勤學すと云へば、身代もよくなりしと見ゆ、なにも悦ばしきことありとて、物語して歸たれど、家のさま、純帳など可とも見えず、蚊帳さへろくなるはあるまじきに、又例の譫言ぞきゝにくき、いざ一泡ふかせ呉んとて、翌る朝拂曉に、再度訪問たるに、折ふし未だ見覺ずときゝしかば、こは幸よしとて、ズット寢間に入見ば、破れかゝりし紙帳の中に臥居たり。さもこそとて、寸白老、寸白老と起しけるに、目をこすりつゝ出來るさま、彼友を見て大にあはてたるさまなれば、彼者、昨日は純帳の中にと云れしに、此が御身の純帳にやと云ば。寸白せかぬ貌にて、いつもは純帳の中にやすむなれど、夜前はすこし物好にこれを釣たりと云ふ。さればなり、此は何と申すものにやと云に。此は先考の頃に造したる、余が家の重箱の覆紙なりと云しかば。さて〳〵いかな譜上を云者もあるよ、御身の家にその重箱のあらば見まほし、いかにも此程の覆紙せんほどの重箱なれば珍し、ぜひにと云ば。さればなり、未だ先頃のこと、奈良の大佛の方にて、萬僧供養せんに、貸し給へとて、使に來りし仁王か、持去りたれば、いまは此所にあらずとなん答へし。

スチーリングの淡泊　しきたへ

嫁娶のことは親と親との結ぶ可きものには非じ、さればとてまた自己の撰びにのみ依賴すべからず、一度自己の撰びによりてこれをなす時は大なる過ちなきにしも非ず、嘗てジェルマンのジャング、スチーリング若かりし時旅人宿に雇はれし事あり數多の部屋に給使せしがスチーリングは當時其伉儷の事に付ては毫末の考もなかりしが不圖一婦人を見たり彼れ忽ち心に思ふようかの婦人こそ我が妻たるべきものなりと、淡泊に己が希望を物語れり然るに彼の婦人もまた有の儘に胸中の思を述べしにこれも同じくスチーリングを愛し居たりと

スチーリングは自らの經驗によりてかゝる單純の互選法却て一家の幸福を增さん事を證せり、然れど余はかゝる例を以て如何なる時に於ても幸福ありとは述る能はざるなり、余は何故に彼を愛するか、彼れは何故に余を愛するか、蓋し是等の事物に付ては回想、祈禱、道理、熟考の諸念相伴はざるべからず、愛はこれ道理を暗まし架空の想像は思考の念を蓋ひ判斷の眼は盲ひ分別の耳は塞がるに至り豈よく實の愛情そのうちにあるべけんや、スチーリングの如きは一時の僥倖のみ世の青年男女深く此の點に猛省して可なり、嫁娶のこと一に兩親の命に從ふ可くも非ず、されどまた自己の擇びよのみ依賴すべからず。

ハワードの死

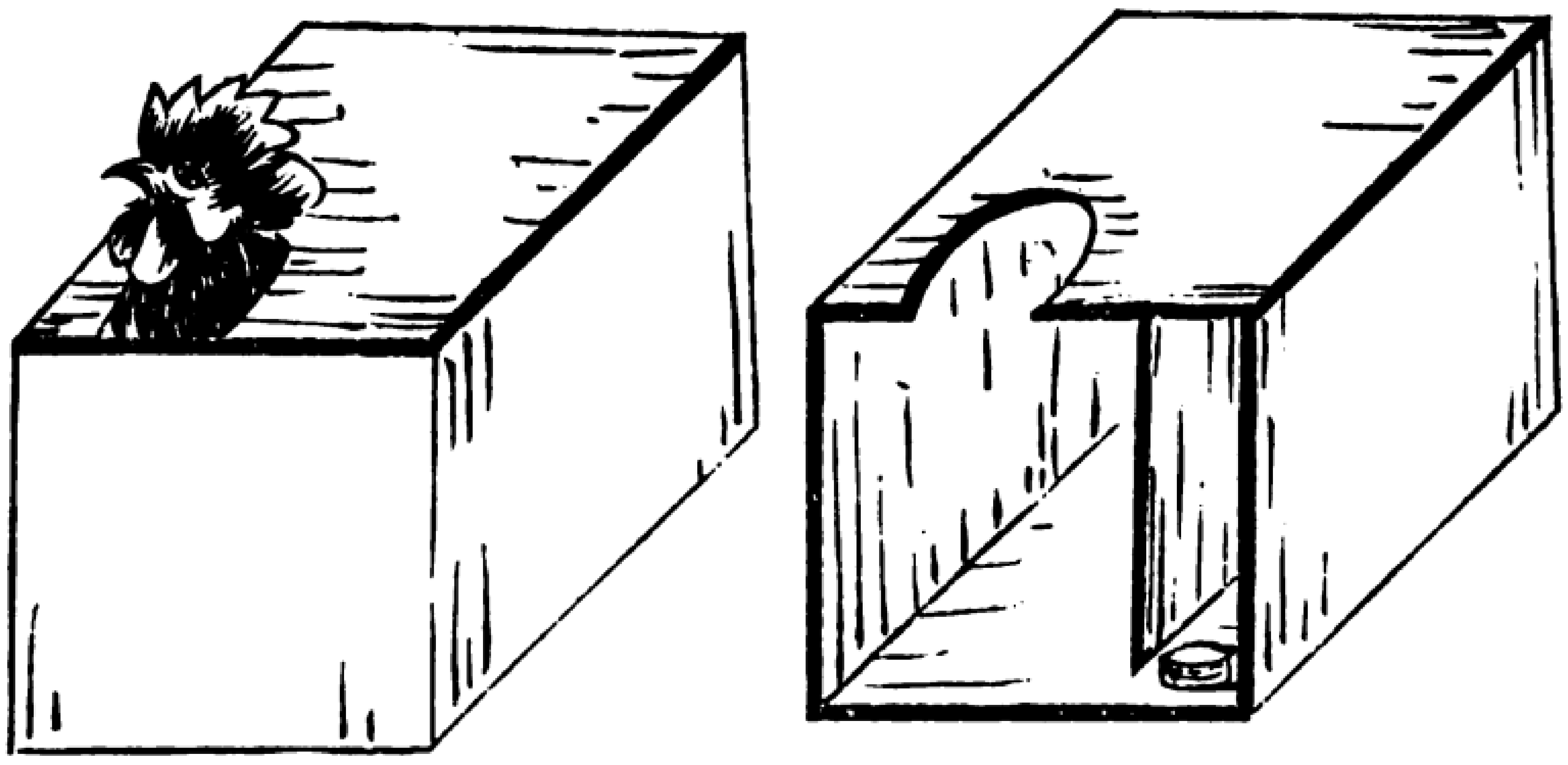
破月子

ジヨンハワードの死せんとするや其枕邊に在りし牧師は何卒彼の心魂を快活ならしめまた其臨終の近付きし事も可成は知らしめざるようと勉めたりしがハワードは其樣子を察し云へるよう、御身は愚かしき物語をせらるゝ事よ、我が身を死と云へる考より離らせんとせらるゝも、我が身は死をば決して恐れ申さず、むしろ一種ことなりたる考を以てこれを迎へ申すべし死は世の中の樂しみと同じきように思はれ候たとへ苦痛の多かるとも、死は他の賜にまして神に謝すべきものなる事は確かの事に候、我身の生命は長壽とも申されず元より我が生涯いはこの熱病を免れ候ようの事出來ざるはもとより覺悟の事に候もし我れ君の勸めの如く生命を保たんとなれば動物の食物を飽く迄食し酒も飲む可くまたいろ〳〵食養等もしたらんには恐らくかくはあるべくも非ず、吾が平日食物とせしものは野菜及水其他僅少の麵包と茶とを食物とせり、われかく多年の間貧窶のうちに生活したればこそ今回の病を招き候事にて深く怪しとするに足らず、言ひ畢りて傍の朋友を見かへり莞爾とし云へるよう御身等如き樂しげに見え給ふ方々は恐らくいかでこの熱病をしのび得給はんや、と心何となふ樂しげならず心を外に轉ぜん爲めか顏をめぐらしてしばらく沈默せしが心中萬感の溢るゝが如き樣見えたり、軈て意を決せし如き樣にて、ダォーヒィニーの村近くにうるわしき土地ありかしこは吾が死後に葬られん事を望みし地なり何卒其處へ葬り賜へ、しかして葬儀の事なども飾りなど絕へてし給ふべからずまた墓標など建て給ふべからず唯だ埋め賜はればそれにて足りぬべし、わが墓土の前に日光を照らし後世の人をして忘れさせよかし。

家の手わざ

羽虫の驅除

第四羽虫の驅除は。最も大切のヿにして、大害之れより生ずるものあれば、極めて注意を怠るべからず、人々此事に付百方苦慮して種々の方法を按ずれども、左の法最も宜しとす、雛に羽虫の生ぜしときは甚だ恐るべきものにして、之れ必ず母鶏より傳播せしものたるべし、故に此ときは石炭油を筆に濕ほして全身に塗抹するか又は「テレビン」油に龍腦精を混じて塗抹す、然れども卵には決して石炭油を塗るべからず、之れ卵の氣泡を閉塞して腐敗するに至ればなり、



又抱卵せる母鶏にも決して用ゆべからず、好し抱卵せざるものと雖も、大鶏の多くは之れを用ゆべくもあらず、故に親鶏には硫黄燻蒸法を以て最も可なるものとす、其法は蜜柑箱を以て上の如く作るべし、而して之れに鶏を納れて其頭部のみを上孔より出さしめ、其一隅なる小皿様の器中に硫黄を載せ、赤熱したる鉄釘一二本を之れに加へ、次圖の如く蓋を以て之れを密閉し、充分燻蒸するを計りて之れを出すなり、此の如く三日間も續くるを得ば、能く之れを驅除するを得べし、又其巣は直に能く掃除して硫黄花又は石灰を散布し、時としては其巣箱を燻蒸するも可なり、若し其巣内に藁、砂等のものあらば、盡く之れを新たなるものと換へ、其燃さるべきものは皆焼捨て、砂等は他に取捨てゝ水中に入るゝか又は硫黄花等を撒布するか、殺虫法を施すべし、以上は驅除法なれども、要するに豫防法に增すものなし、則ち先きに述べたる如く、舍内の清潔と、石灰又は硫黄花の撒布と、及び不潔物の捨塲を整頓して、不始末なるヿなからしめ、且砂浴に供すべき、輕燥の土に石灰等を混ぜしものを常に備ふるヿ之れなりとす。

小説

野邊遊び（其七）

優香里

藪に捨てらし嬰兒の泣く聲聞けば母の乳房を慕ふならん憐れのものと思はぬ人わありますまい、父を尋ねしとし子の言葉に母はもとより傍の人にも何と答へをなすべきか、涙をすゝる音計りですこの日は朝まだきより雨のふり出でゝ内外何とあふしめやかに軒の金絲鳥さへ羽音もたてず囀りもしません母親はよう〳〵聲を勵まして

昨夜電報を出したからキットもう御歸りだから安心をし、そして何かたべないといけません、ソップは嫌かへ

おつかさん私はいまそんなに苦しくもありませんから……どうぞ少し何か御話しでもして下さい……ケレドモ私しも少し御話しをしますよ、

御話しをするのもイーがつかれるといけません、

大丈夫です、おつかさん私が死んだらどうぞこの指輪を岸本さんに上て下さい、御松さんにそれからどうぞ私が今迄恨だ事を許して頂戴つて、チ、おつかさん

噫何と云ふことでしやう一寸と思ひ出しても不愉快そうな顔をしたりまた松子の事と云ふと目に涙を出した子がこのような言葉を――なほも云ひ續けて

そして長岡の健さんに私のように岸本さんを愛して下さい兄弟のようにして交際て下さいつて……私は死んだら御とも達もないノチー、死だらもう……

言一言發する度毎に母親は胸を裂かるゝ計りです、

何でそんな悲しひ事を云ふノダへ――死ぬなんて事があるものかチ、氣をしつかりしてなほると云て居ないといけません、おとう樣も明後日頃は必度御歸りだから、

遇ひ度しと思ふ父―、今は傍に居ぬ父です、ほしくもなき命死ぬと云ふ事を覺悟したとし子――幼氣にもかひ〳〵しく然しまたよくも知らず唯だ夢中に――父の面を見る迄は死に度ないと思て居る心明後日迄は死ぬまいと決心はしたがさて明後日が何よりも待遠く野邊遊びの先晩よりも、

明後日御歸りナノ……私は死でもまつて居ますワ、そう思て居ないと……オイ御取次ダヨ誰れも玄關に居ないノカチー、花や一寸と行つて御覽、

花は玄關の方へと行きましたが軈て戻り來り

奥樣長岡の若樣が御出になりました、

ソーカへよくまあ、仁田のおぢさん長岡さんがいらしつた

そうデスおとし御目にかゝるかへ、

イアさつきから己れはつかれるといけんと思て冷々して居る處だから遇はぬほうがよからう、私しが一寸と應接をして置くとしよう、

立たんとする叔父を引止めてとし子は

兄さんのようにして居る長岡さんですから、遇てもイヽノおぢさん私は御目にかゝります……けれども

仁田のいまだ立たざるに無邪氣の少年は戸を明て入り來りました、

御免なさい、仁田さん今日は、おばさん御機嫌よろしふおとしさんが御病氣だつて父もよろしく、おとしさん大層お瘦せなすつたとネー、西ケ原の時から惡かつたノダッテ、困りますネー、

エー、私は貴方にサンクして死にます

死ぬ、ウソダ、ネー仁田さん

イーエ本當、御とう様が御歸りになると……ムー、オホン〳〵嗚呼苦しひ、御つかさん苦しひ……水……おとう……ムー、

それ御らんまた痛むのかへ、サー水、何處が痛いノ、エ

とし子は此時何も云へません、少年は啞然としてしかし眼の中に一ぱいの涙をたゝへて見守りました、おとしさんは死ぬのかしらん、この人を、天の使のようなを人を而して暴き獅子の如き死の口へアー。

寄書

女學生出校して後學びたりし學科の何れか尤實効を奏せしや附たり出世後學窓を顧みて敎科上に於ける感覺如何

さほくめ女史答稿

妾は九才の後までも只管に學ぶべきの學問にのみ身を傾け居り廿二三才の頃よりは一家に嫁し付き其後は六七年以來專ら家政の事にのみ心を寄せ居る者なりしが今問題に就きて考へ見れば何れも普通の學問は諸學科より受得たる智識の相集り和して一身の智識の成就するものなれば何れの學科と云ふ區別もなく普通の學びし學科は皆己れの處世に實効を與へしものなりと云べき筈なるに學術にまれ藝術にまれ又は世の樣々のすぎはひにも兎角論議理屈の通りにのみは參らざるものにて數多の學科の中に於て格別直接に實効を奏したりと覺えしものもなく妾が今日一家の主となりて家政を司どる身の上より考へ見れば家政學こそは第一番の實効を見しものならんと思ひの外他の學科に因りての智識と較べ見るに格別家政學の優りて實用に適ひしとも覺えず一寸の讀み書きを始め博物理化の智識或は裁縫何れも皆學校にて覺えし効と云はざるを得ざる功なれども本問に對して格別に其一を擧ぐるまでの感覺を與へし學科もなく唯妾は兼て生理學を好みしが好きなる學問とてや己れの知らざる間に生理學は他の學科にも勝りて深く覺えしが今となりて吾が身の保養子供の養育等には衛生上大に生理學の効の著しきを自らも感じたる事共多く覺え侍りぬ些し問題に外れかしこけれ共直接に處世の助けを爲して著しるしきものは唯兩親の庭の敎なり之れのみは事に觸れ折に感じ日に夜に嘗て忘るゝ時の候らはず。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

教科上に於ける感覺とは問ふ人の心は何所の點にあるか確と解し難けれども學窓を顧みてとの發言なれば學生中の快不快同窓交情の深疎凡て數年の間勉學中に過ぎ去りし舊事追懷の感情の謂ひ乎將た學科上受業一偏の感情の謂ひ乎果して然らんには格別異樣の感覺も今は殘り侍らず何となれば妾の學び修めしは皆何れも普通の學校のみにして大方は極りある學科なればなり授業の巧拙師生の情誼などの如きは其時々の出來ばいのものにして今更に其感覺を追懷する程のものもなく唯單に學科上と云ふ其普通學科の科目の夥多なるに從ひて日課時間數の多きとは柔軟なる天性の女子には少し多きに過ぐる樣感じ侍りぬ學生の當時にありては兎角を云ふ可きにもあらざれば默止し居りぬれども時々其繁忙なるには耐へ難き程に覺えたることとも侍りぬ。

女醫學生

W某

新聞紙上女性の報知及び女生增加の報知を見る益多し日本女子の進步は日に月に盛んなり吾々男子は家政上に顧省するの念慮を全く家外の事業に注ぐとを得るの日は追々に近きたりと云ふべし若し夫の域に達するを得ば眞に女性は夫の目的に達し男子の敬愛を得玉ふべきの日なり此愉快なる日のなるべく早く到着せんとを希望するの外なし。

茲に余は女性にして醫學に志し玉ふ人々に申し度とあり之より醫學のみならず一般の事業一として容易なるものなく困難苦心は志望を挫き窮厄失望は熱心忍耐を鈍くする塲合多き敢て云ふ迄もなきとなり然れとも流行之潮勢は時に一般人心を誤る復少きにあらず醫學を修めんとする女子の注意すべき時期なり。

醫學は女子に適したるの職業なるや不適當なるやは日本の大醫學者及び歐米の醫士學士にして口に筆に述ぶる多しと雖も未た定まる議論もなく余り感心すべきものも見當らず且つ歐米人が自國の女子に對する考を以て直に日本國女性に應用するとは難き事にて又望ましきとにもあらず歐米女醫の進步は如斯日本女性も何んぞ異らんと云へば最早云ふ迄もなき猪武士たるに過ぎず。

醫學の進步は万有學と密接の關係あり万有學一步の進步は醫學の一步の進步なり醫學は一日も万有學者より離るべからず昨年ロンドン醫學會々長英國醫學者は萬有學に注意するの淺薄なるを論じ又大に之を慨嘆せり余も每に感ずる處なり萬有學上の智識は醫士として一日も欠き難く之を欠けば醫學の進步は望み難く醫學の基礎は萬有學にありと云ふべし。

日本に於る万有學上の進步は甚た不完全と云ふべし即ち之を敎授するの學校は唯少數のみ男子に於て然り況や女子に於てをや凡ての万有學のみならず普通教育は男子に比して低度にあり夫の不完全なる一般教育を以て即ち不完全なる基礎以て醫學を學修するは余り得たる策とは信じ難し勞多くして功少し然れとも既に醫學に志せば小成を安ぜず學理と應用を鋭意研究すべきは理の見易きとなり日本女子之學事上の進步に對して能く達すべきや否やは大に疑ふべきなり寧ろ尙ほ女子に適切なる事業に熱心を向て夫れに由て大成を見んとを希望するものなり余は二三の女醫生に聞けり小兒科の如き婦人科產科の如き男子よりも女子に適當せりと或は然らんもし男子にして能く小兒科を修むるが爲に小兒の死亡數に幾プロセントの差を生する如きある乎又婦人にして同性の女醫なるが爲に男醫よりも進んで治療を受くるやは未た知り難し小兒の如き男子よりも女子には早くなじむ位のとはあるべし而して夫が爲には今日迄大に苦心せんともあらんが夫を診察するに於ては又種々の法方あり必ず女醫の必用を見ず婦人も今日迄聞きし例は未た數も多しとは云ひ難しとも反て同性の女醫よりも異性の男醫の診察を甘ずる如きは余も嘗外なりし是等は元より唯一二の例に過ぎず小兒科婦人科產科とても一般醫學を修業せし上にて一科を專修するのみ一般醫學の完全なる教育は又專科をも完全せしむべし不完全なりと云はざるを得ず余は只之の一事より女性が尙ほ適切なる業によりて熱心なるを望む余は女性か一家の女王として尊ばれんよりは寧ろ強壯有爲なる國民の母として敬せらるゝの優れりと信ず男子に非常なる數多の職ある如く女性に適したる職業あるを信ず。

余は唯だ醫學の上より考を述しのみもし女醫として世に立ち一家の關係夫婦の有樣に付て考ふるなれば尙多くの不快なる箇條を見る多からん之等は今余が述ふべきの箇條にあらざれば云ふを要せず。

間髮一

はな

假そめの書の葉草に風たちて
露のこの身の置きどころなき

一顰一笑猶愛むに足る況んや是れ一言一行をや、西東千里も岐路一步、五十年の浮沈は間一髮、無言の雄辨、不爲の行、之を放ッては滔々洪河を懸け、之を收めて藥壁一擊四隣乍ち寂、若し之をして操縱所を得ざらしめば一世の長技も亦何爲れぞ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

常に無き女生

醫士　長竹正德

曩に女子教育の道駸々として擧り進化開達の美境に入り日本女子の美德を完ふするは想ふに多年を出でざるべしと大に女子に望む所ありしは惟り女子教育家のみならず社會的博愛家の腦裏に此感動頗る鋭敏なりしに不幸にも昨年來女學生女教師の失德姪聞四方に發し爲めに女子高等教育の一折挫は免かるべからざるの異數となり今や世人の女子高等教育畢卒業生を待つに忽ち學術的深淺を問はす寧ろ德義的眞否を顧るの念切なるを覺ふるは流勢の然らしむる所眞に歎ずべきなり然るに西多津孃の如きは溫厚篤實の學生にして言語少く品行方正能く節操を守り能く信義を失はず日夜勤學五年の久きに及ぶも猶は一日の如く邂逅出遊するや必ず監督學姉の誘引によらざるなし今回業を卒へ頗る優等の名譽を得（去二十八日）皈阪せり實に高等女學生の日本固有の女德を養守する一龜鑑として見るに足るものと信せり若し幸に善行は墻を越へす醜聞は千里に走るの通弊なく西多津孃の如き學生其人尠きにあらざらしめば女學生の失德を責むる昨年の如き囂々たる酷評なく今年の如き學程の挫折なく將に駸々として女學の發達を見しならん惜哉（以て西孃を讚するの一辭となす）今爰に西多津孃の勤學善行を賞嘆して特報するものは現今の不德女學生を矯め後來の女學生をして善行勤學に怠らしめず能く日本女德を完ふし流勢能く學程を進め日本文明の良母を製造出せんことを切望するの意に出るのみ。

因に記す西多津孃は大坂市東區淀屋橋北濱五丁目百十一番池西儀兵衛氏の次孃にして往年同府々會議員豊田文三郎氏東區々長等の推薦により同區愛敬女學校より東京留學を命せられ荊妻の皈京に隨伴し弊屋に寓し荊妻の監督する爰に五年なりき。

開書

今日に至り御社鴻恩に聊か謝ふ

筑東　井蛙女

不肖にして寒村僻地に在りながら身に相應しからぬ高潔の文字拜覽いたしゐて謝するに者なく只三伏九拜のみ倘此度出學する能ハざるの女子に適當の女學通信發行に就て妾の喜悅筆に盡しがたく女子社會の利益に配慮し給ふ御志しの程有がたくぞんじ居り候倘向後教育の進歩をはかり給はん事を奉願上候。

そがさふさき雜誌を讀て何となく親しく何故となればば妾事ハ三歳にして實母に別れ十一歳にして父と別居し姉兄に教育せられゐ尤も父の住所とは五里を隔つるのみ故一ヶ月に一度つヽハ面會いたしおりゐ其頃姉兄には子無く不束な妾を實子の如く愛し給ひ世續にせんなど申ゐ事も有之候へども妾これをいとへ身の不肖を自ら顧て嫁くとも嫌ひ候へども繫く緣しにや只今の處へ嫁し候處もとより夫には兄弟なく其身と父母在るのみ父母は恐しき姿なば實娘の如く愛し吳れ候妾も又孝てふ文字を行はんと思ひ明日は如何にして孝をせんと臥するまで思を忘れず居候然るところ妾嫁して程なくその夫兵役に當り東の都ある隊の養斑に星を數へ居る故家事出納方萬端は教育を知らぬ妾に任せられし時に當り女子の教育の要用なるを覺え候只今の妾の父母は最早長年にして且昔人の僻とて文學の何のと云ふ事は少しも知らぬ故妾諮嵜の際にも理解する能はざる時に當り（知らぬ事は知りたる人に問ふを恥ぢず）てふ事を思ひ出問はんにも答ふる人なく始めて女學通信あるを見て悅び忍ぶに堪ず斯は懺悔仕候不肖の身もかへりみず拙なき筆の前うしろ揃はぬだん宜敷おんはんじれぎあげ候父母ある上に父母と賴みてかくなん

あふかしこ

文詢

●僻地の一塞女生　英語の文法を學ふには成る可くは讀本の三か四かを讀むだあとが宜しひと思ひますそして最も初めには スゥヰントンの小文典かブラウンの英文典が宜しひでしよふ、英語の會話を學ぶにはイムブリー氏の著に係る會話篇が宜しひでしよう文部省で出版した「カンヴァーセーショナル、リーダー」と云ふのは五冊續きで一冊三十五錢宛です一冊宛買へます是も宜しひ本と思ひます

●伊豆國君澤郡三田君　元良勇次郎先生の心理學は是迄出版せしものは無之由、普通教育の心理學は倘校正の上此夏迄には出版致さるヽとの事です

●豊後杵築長谷部君　幼稚園記といふ書物は只に遊戲法を説くのでなく幼稚園に係る凡ての事柄を數へてあります

●大坂讀者の一人　基督教は國風を破毀するの恐れありといふ人は大抵曲つた眼を以て基督教徒を見るからそう思はるヽのでしよふ深く基督教を知つて居る人の言ではありますまい何れの點より斯く云ふか人に依つて見る處か違ふのでしよふから此處で申上る事は出來ません。國會、議會、憲法抔は神聖なりといふ時は宗教上で云ふ神聖とは少し意味が違ふので只國家全体に關する議會であり憲法である故一個の專橫氣儘にする事が出來ない即私しに犯す事が出來ないと云ふ意味でしよう

●渡邊むら子君　植物標本を作るのは左程六かしきものでないから之を教へる書物といつて格別見受けません只草木の葉や花を紙の間に入れて重き物で押へて置くと其水氣を紙が吸ひ取るのです之に樟腦を少しかけて置けば宜しひのです。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

還御を迎へ奉る

兩陛下恙なく還御ましましぬ、謹んで之を奉賀す、但だ路上忌はしきの怪物御目に留まりしとやあらざりけん、彼等も亦た日本の地に住息するもの也、願ふらくは仁德嚴かに布き如此き魔物の速かに退滅消盡せんことを、謹しみて祈る。

學頭皆空々

後生道に迷ふとは夫れ今日の謂か、榎本文部大臣は儒教の繩を以て文明を縛すべしと主張し、加藤前總理は耶蘇教と佛教と神道と何れか好きを辨ずる能はず故に三者を共に一塲にて演説せしめ六才の兒童に之を撰擇せしめよと立案し、渡邊現總理は儒教は古び過ぎ佛教は濕たり過ぎ耶蘇教は新らし過ぐ故に日本に於て一新經を創立すべしと論ず、嗚呼今の學頭大率ね如此き空論を吐けり、后生の道に迷ふ豈に偶然ならんや。

貧民救助

貧民を救ふの望は只だ固息なる慈善手段にて達すべきにあらず、夫れ貧民は何によりて來る、世に普通教育の行はれざると一元因也、租稅過重にして其稅金の無益事に使用せらるゝと一元因也、政府徒らに干渉し民に自由を與へず總ての發達を束縛すると一元因也、道念廢れ國德衰ろへ民の貪慾私利に我儘なると一元因也、法律宜を得ず幣制道に適はず下に信用の乏しきと一元因也、苟くも此等の諸元因除かれずんば、今日百の貧民を救ふとも明日亦た千の乞食を生ぜん、與を以て人を渡すとは決して社會救濟の上の信切にあらざる也、苟くも國民の窮乏を救はんと欲せば、先づ其根本より改良培養し來らざる可らず。而して此等諸元因を除かんには、世人の道念を喚發するを以て第一の要法となす、政治家にして德あらば法律幣制租稅の事漸やく改まり、國民にして德あらば普通教育の事亦行はるゝに至らん、故に最先の要法は先づ明德を明らかにするにあるなり。而して明德を明らかにするには、實際に慈善の事を施行するを以て良法となす、吾人は必らずしも固息なる慈善法を以て困窮の直ちに除かれ得べきものと信ずるにあらず、慈善や即はち他の大ひなる教育となるを以ての故に之を重んずるのみ、彼の冷々たる經濟家と云ふもの何んぞ能く此の理を知らんや。

起てよ、姉妹

見よ今日の窮民を、米價いよ〳〵上り、惡雨いよ〳〵下り、大饑饉、大困乏の徵現然として顯はる、姉妹等が涙を要むる

のうめき、東西南北にきこゆる也、聞け、到る處ろにうめくあり、呼び叫ぶなり。

復歸

大同團結、再興自由黨、愛國公黨の三者亦た復緣せんとす、破鏡或は元に復へらざるべし、三黨は安んぞ昔しの戀しからずして止むべき哉、一時の喧嘩によりて相別れたるものが、斯く平らかに圓ろく治まるは、何よりも目出度事なり。

調和に贊成す

モルレーの調和論を著はすや、人は其眞理を自信すると同時に之を實行するの義務あり其結果の榮辱利不利は顧みるに及ばずと云へり、則はち英國民を調和的の人種なりとして太だ其の勘辨づよく斷行心乏しきの通弊を歎ぜり、調和のものたる未だ必らずしも善なるにあらず、凡そ調和は勇なきもの果斷なきもの臆病なるもの保守的あるもの、得意手段とする所ろのもの也。

調和に反對す

然れども調和未だ必らずしも不善ならず、英國敎會は三百年間調和によりて生存し以て道心の基本を維げり、英國憲法は年々の調和によりて落成し以て身心の安固を立たり、ポウルは調和によりてテモテに少量の酒をすゝめ、モゼスは調和によりて頑愚者の多妻を容るせり、其他古來の大戰爭大革命の如き大率調和によりて平安に結了したるにあらざるはなし、調和は大平和來る迄の傳道者なり、案內者なり、維持者なり、調和何んぞ必らずしも不善ならん。

調和の調和

調和の善不善は、調和其ものゝ躰に存せずして調和の目的何如によりて岐るゝ也、若し夫れ分裂すまじきものが分裂したりとせば、之れ素と故意に平和を害したるもの也、如此きものが調和によりて其元に復するは無論然あらざる可らざるのもの也、如此き調和は寧しろコムプロマイスにあらずしてピース、メーカー也、相讓るにあらずして自然に復したる也、左なくして豈に之を何如んせん。夫れ事物皆な異同あり其同じきの性を認めて相合するは調和なり、其不同の質を認めて相分るゝは破壞なり、其兩性を認識するの彼にあるか此にあるかは即はち一大問題あれ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廢娼記事

●東京廢娼會　發起會に於て定めたる委員九名は去る六日午後明治女學校に集會し、東京廢娼會々則案を左の如く議定し、發起者及び一般の會員へ報告したり、追て來る十七日午後三時木挽町厚生舘に於て年會を開き、此案を確定し又た委員十五名を撰擧すと云ふ

東京廢娼會々則（案）

○一名稱、本會は東京廢娼會と稱す○二目的、本會は公認娼妓の制を廢せんことを望む○三會員、本會の目的を達せんが爲め力を竭す者を會員とし之に贊成を表する者を贊成員とす○四會員義務、會員は每年一圓以上の會費を納め年會に列し委員を互撰し常に本會の目的を達せんことを心掛くべし○五入會手續き、入會を望むものは會員二人以上の紹介を以て申込み委員會の承認を經ることを要す○七委員會、會員は委員會に列席して自説を陳ぶることを得但委員會議員の數に加はるを得ず○八贊成員、贊成員は出金の義務なく應分の輔助を爲すと否とは其意に任す○九會期、每年五月年會を開き委員を改撰し事務を報告し運動事業の大躰を議決す、委員會の所望若くは會員三十名以上の所望に依りて臨時會を開くことを得臨時會は其決議に依り年會同樣の事務を施行することを得

●日本廢娼同盟會　同會は各地方の廢娼會及び廢娼同意の一個人より組織する者にして、每年一回年會を開くことは前號にも記載したる所なるが、いよ〳〵本月廿六日ある劇場に於て之を開き、會后大演說會を催うすの計畫なる由、其計畫の大畧は東京廢娼會委員會に於て案定し、廢娼壯年義會に於て同意したるものにして、執行の順序及演者は大畧下の如しと云ふ、但し左は未確定のものにて追て確定の上へ廣告あるべく、尙ほ之が爲に各地方の廢娼會へは年會出席の事を申送られし由なるに、上毛青年會員の如きは非常の熱心にて、旣に別項にも見ゆる如く委員三名を上京せしめ、且つ一週前より在京して其準備に加勢せらるゝと云へり。

廢娼同盟會大演說會目論見

演說會主會。石島亘三郎、中島信行、德富猪一郎、島地默雷、三宅雄二郎、湯淺二郎、小島官吾、伴直之助

演說者人名。森林太郎、大江卓、植木枝盛、ノツクス、島田三郎、中濱東一郎、宮川經輝、海老名彈正、横井時雄、………尙ほ此中未確定の分あり、玆には只だ其大畧を示すのみ、追て確定の事を聞かば更に報告すべし。

●神田台所町青年會發起廢娼大演說　其景況として青年會員三宅一郎氏より左の如く報告あり、

拜啓陳者兼而貴社へ種々御手數を煩し候當青年會婦人會發起の廢娼演說會愈五月三日上野廣小路上廣亭に於て開會仕候尤も當日は御承知の通り甚しき雨降にて會員一統失望落膽の淵に沈み候然處斗らざりき未だ開場の時至らざるに聽集門に絕ず忽ち滿盤立錐の地を餘さず四百餘名の多きに達し出席辨士は何れも熱淚を揮ひ不思机上を打つに至れり殊にイビー氏は大英國管內廢娼論之興廢てう題を以て實際上より存娼を說破し廢娼の可なるを演せられ其思想の周密なる驚くの外なかりし只恐らくは當日有名辨士巖本氏は當時御疲勞の趣にて懇に御手紙を以て斷はられ且つ黑岩氏は何故にや出席無之會員は如何にやせんと思を苦め居り候處廢娼壯年義會員入江錦五郎氏へ依賴せしが同氏直ちに承諾せられ壯年義會會員募集旁演せられたり聽衆は一人の不平なく拍手の間に閉會す尤も謝すべきは巖本氏より罷々使を以て廢娼可滅三十部地方人へ配與の爲寄せられ豫て地方人士へ配與仕候會員一統歡聲歡喜貴社幸に該況を單簡に雜報欄內へ御掲載廢娼論の盛なることを江湖に御知せ被下候ば幸甚。

●上毛青年聯合會　群馬縣知事の指令未だ十分ならずとして同縣下の青年は復び勃興し、再應大運動を催うさんとして今や石島亘三郎氏は全縣下に遊說し、且つ過る廿七日には聯合會の委員會を開きて左の三要件を議決したり、此頃は養蠶時期にて縣下の人々は大抵夜も眠らぬ迄に繁忙なるに、同會の委員會は格外の多人數にて、滿塲異議なく直ちに左の如く議決したり。

一　縣知事及び內務大臣へ建白書捧呈する事

二　廢娼の目的を達する迄運動停止せざる事

三　廢娼同盟會へ委員三名を出席せしむる事

●橫濱青年會　來る十五日廢娼大演說會を催うさんとの計畫中の由なり。

●廢娼論者を擊んとす　深川邊驅梅醫員の話しに、過る日遊廓內にて、博徒を語らひ重なる廢娼論者を擊打せんとの計畫ありし由なるが、何ゆゑか中止せし趣、若し然らば直ちに知らせんと思ひしが、中止せしゆゑに其儘にせしとの事を語られし由、傳聞しぬ。實に遊廓營業者の爲には氣の毒なれど、吾黨はいよ〳〵奮起盡力せずんは成らぬと也。

通信

咄々怪事

神戸、井上誠之助。

醜妓の奉迎とでも題する方新規ならん乎そは近來の流行言葉なれば大不敬――記者足下の心の儀になし玉へかし

本月廿四日　皇后陛下は神戸停車塲御通輿の際玆に藝妓數名高等官等と共に奉迎せりー舞子迄見送りしとの風評もありたれど是は虛說にや諸新聞には見え申さずー之より赤十字社員の資格で奉迎したとか市長鳴瀧氏の招きに應じて參りたりとか申せども何にしろ醜妓は醜妓にちがいなく孔雀の物つけても烏は烏にちがいなしー之を招きし市長も市長、招きに應じて奉迎せし醜妓も醜妓、白晝汚れしやつが横行するには困るとは心ある人のなげきなり

又玆に申置かればならぬとは　陛下を奉迎せし有爵者高等官と共に否同じ所で醜業者でさへ奉迎するを得るとせば普通人民殊に有爵者高等官の妻君方は勿論奉迎するを得べき筈なるに婦人の方は他に一人も見えずとはさても〳〵歎ずべき至りならずや神戸に在る數十の高等官の夫人方は斯くも不忠なる者にや疑はし在神赤十字社員は藝妓に限るにや兎にも角にも今度のは奇怪千万女學雜誌社記者よろしく筆誅あるべし

小生は匆々の際亂筆にて認めたればよろしく御推讀を願ふ別紙に神戸又新日報之に關する處を寫し取りたる者あれば呈すべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四月廿七日神戸又新日報に赤十字御社員樣方の來狀と題し左の一項あり

一昨日の紙上藝妓奉迎の事に付て昨日一葉の葉書か本社へ舞込たり差出人は大日本赤十字社正社員奉迎婦人組とありて其文言の大畧は(前畧)妾等は當日市長樣の御案內により大日本赤十字社員の資格にて奉迎せしものゆへ離隔せらるゝ筈なし恐多くも　陛下御發咫尺の下に奉迎を許さる社員の徽章あるものは同列にて奉迎したるなり妾等平日賤業を以て生活するとも當日は赤十字社員なり無根の事を書しては頂戴の徽章と赤十字社とに對して失敬且つ名譽を損するなり云々扨てもごえらいご權幕かな堂々たる赤十字御社員樣とありては吾々も頓首閉口仕るか併し無根の事は書き申さぬ現在社員が……オット徽章に對して何にも申さぬ。

同新聞四月廿五日雜報中に藝妓奉迎員の中に在りと題し昨日　皇后陛下か神戸停車場御通輿の節同場內に奉迎するを得るは有爵位者高等官の人々のみなりとわかれて聞居たるに如何しけん其中に四名の紋附扮裝の婦人あり胸に赤十字社の徽章を佩たるを見れは同社員にもあらんかと思ひしにやかて神戸驛長は此婦人を出入口の處へ連行き他の奉迎員とは隔離の場所にて拜觀せしめたるか右四名は誰だらう中檢と西檢の藝妓方鶴小久若吉小鈴とか名乘る方々にておはせしとぞ。

此度皇后陛下舞子の濵へ御幸あらせ賜ひし時神戸停車場へ御着其せつ奉迎の人々は縣廳裁判所の官吏武官なそに候しけなれと其うちに神戸中西兩檢番とやらの校書四名赤十字社の徽章を掛け居りしを見うけ候由(尤も右校書等は御着車前に出口の外へ出したり但し驛長の注意にて)又御泊所なる龜屋方には大坂の藝妓十五名程も宮人の裝をなし右の龜屋に居りしをも見うけ候由當地朝日新聞に記載致しあり候まゝこれを見し妾等は何の故に同家に居りしやは存不申候らへ共むかしより藝妓と申せはいともいやしきものにのみ存居候へ共此明治の御代には如何なる地位と成り候や癈娼のこと盛ある近時これ等をも伺度何卒御示しのやう御社の御紙上御明も御座候へは無智なる妾等のうたがひはらし被下度奉願候、早々不一

大坂、一女子。

女報

○看護婦養成委員　日本赤十字社にては本年より看護婦養成のとを實施せるに付去る廿九日小松宮總裁より三條公爵夫人を委員長に櫻井忠興、足立寬、山上兼善、櫻井夫人、花房夫人を委員に御依托ありたる由。

○京都府尋常師範學校女子部　昨年の京都府會に於て廿三年度經費中より新築工事を起すとに決議したる師範學校女子部及ひ附屬小學校は其搆造總て日本風平屋建にして暑中休課後には落成するの手筈なりと云ふ。

○モリス氏　仝氏は去廿日夕來神翌一日は山陽鉄道會社の招きにより仝氏に緣故ある方々と舞子に赴き網曳等を見られ五月二日には夫人は午後三時より頌榮幼稚園に於て神戸婦人禁酒會のために談話あり仝夜は多聞教會有志青年か貧兒の爲めに設立せる新田夜學會に臨まれ貧兒をなくさめ且金圓リーフレットを寄贈せられたり在神中は當地にある仝氏に緣故ある人の宅をたづれられたり三日朝大坂へ向け出立せらる。

○スペンチル氏貧民を救　わんとて米若干を婦人矯風會慈善部に托せられたり。

○婦人矯風會慈善部　に於ても目下の危急を救わんとて大ひに計畫奔走中の由。

○新聞女記者養成　先頃「ウエストミンスター、エンド、ランベス、ガゼット」の發行者ヒル氏の二子ミス、エミリー及びミス、ジョルジアナはロンドンに於て新聞記者たるべき女子を養成する學校を創立す學年は三年にして印刷、校正、速記及び編輯等新聞事業に關する万般の實務を教授せらるゝ由なるが北米合衆國に於ても此種の學校を設立せられたるに未だ久しからざるも頗る良好の結果ありと因に記す歐州にては速記者の需要甚だ多く新聞雜誌に於て女子の速記術を奬勵すると頻なり。

○印度に於ける婦人俱樂部　印度に於ても婦人の位地益々進歩し種々の集會起るに至れるは賀すべき事にこそ、近着の英字新聞は報して云ふ近頃印度婦人會を新たに起したり甚だ好景況なりと。

○ジュリアン、クラーク夫人　米國に於ては女子參政權の事愈贊成者を得るといふ過日インディアナの婦人會に於て十二の婦人會惣代を迎えて宴を㨾れり其席に於てジュリアン夫人は大に女擴張の事につき演述する所ありし。

○バルトン孃　米國赤十字社々長クラークバルトン孃は常に國內を巡視し病めるものに治療を施し居は人の知る所なり過日もル井スザ井ルの患を見舞ひし由新聞に見えたり。

週報

○官令　去る三十日法律第三十三號にて米穀供給の爲め中央備荒儲蓄金運用の件勅令第七十一號にて行政又は司法區域に關する市の所屬の件同七十二號にて褒章條例中改正の件同七十三號にて陸軍後備各兵隊下士卒被服記號の件同七十四號にて警部消防司令看守長消防機關士警部補消防司令補看守副長官等俸給改正の件同七十五號にて收稅屬官等俸給改正の件等を裁可公布せらる

○宮廷　七日天皇々后兩陛下各地御巡幸を終はらせられ目出度還京あらせられたり

○政治　二十九日內閣會議に山縣、山田、松方、大山、後藤、青木の六大臣參集せり●三十日愛國公黨の諸氏は同事務所に於て議員會を開けり●一日山縣、山田、松方、大山、榎本、後藤の各大臣は登閣して會議を開けり●二日山縣、山田、松方、榎本、青木の諸大臣內閣へ參集せり●五日木挽町厚生舘に於て愛國公黨創立大會を開けり

○新誌　二日廣島縣下の安濃津新報は發行停止を命ぜらる

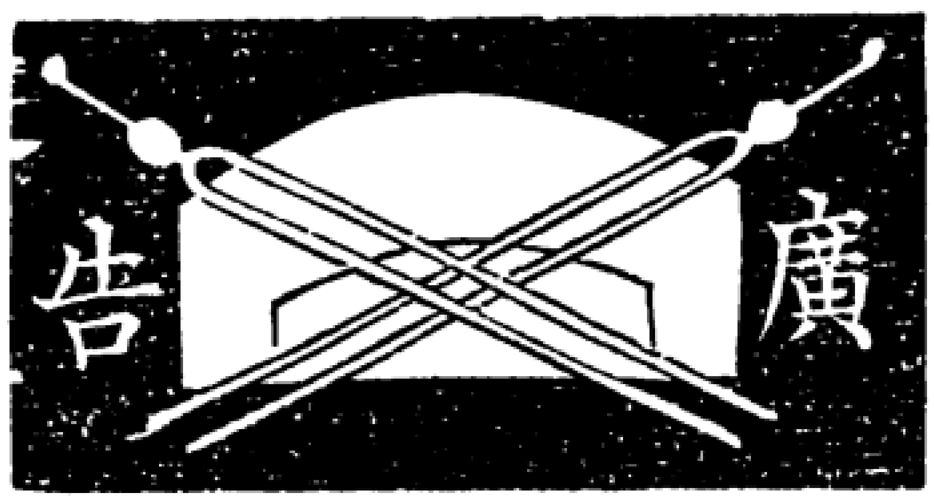
○會社　二十九日甲武鉄道會社は株主總會を開昨年十月より三月に至る半季の報告及び役員の改撰等を爲せり同日九州鉄道會社も博多に於て總會を開き利益配當等の件を議了したり　同日日本鉄道會社も木挽町厚生舘に於て總會を開き二十二年度後半季間收支決算の報告を爲せり

○彙報　三十日舊鳥取藩主正四位池田輝知侯薨ず●三日虎の門內學習院中院に於て工學會臨時大會を開けり

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地 **東洋英和女學校**

廣告



鼈甲珊瑚蒔繪金銀

○御櫛笄簪るゐ
○玉並根掛るゐ
○御櫛笄簪るゐ
○御簪指輪るゐ

御儀式用 櫛笄品々

鼈甲類 珊瑚珠 問屋

日本橋區堺町通ふきや町

小川專助

小兒科診察時間改正

從來ノ小兒科外來患者診察時間午前九時乃至同十一時ヲ改テ午前八時乃至十時トス

明治二十三年五月

本鄕元富士町

醫科大學第一醫院

毎月一回發兌 **廢娼** 第一號既發

廢娼は天下廢娼論者の機關也
廢娼は不幸者の爲めに寃を鳴らすの喇叭なり
廢娼は敗德者の爲めに惡を斫るの利劍なり
廢娼は姦淫の空氣を吹き掃ふ科戸の風なり
廢娼は正義の士を嘯聚する旌幟なり
廢娼は世の仁人義士と勇壯なる青年と慈愛なる姉妹の好伴侶なり

●壹冊金五錢●十冊金四十五錢（全國無遞送料）

廢娼雜誌社

東京築地明石町十二番地

●たむし患者に案內●

我療法は伯爵海舟老翁の所謂**獨得**の神法にして全く世間普通の醫藥と違ひ內攻、再發、留傷等一切の危險なく如何なる痼疾だも容易に根治するは數千全治者の治く確認する所にして世既に公評のあるあり豈復自贊を要せんや遠近の患者特に**他療**にて**治癒**せざる**患者**は速に實驗せられよ若藥効なくば藥價を請けず

專科 **頑癬治療所**

東京神田區錦町一丁目一番地河岸通

遞信省認可

呉服 洋服 白木屋廣告

呉服物及洋服御調への節は多少に不限御用向被仰付度弊店は内外時流の物品を精撰し且外國御注文の品は時日を期して御約定仕諸彥の御服裝に一層注意を加へ頗廉價に調進仕候間御愛顧御購求を乞

尚夏物服地及珍柄フラ子ル●セル單物地等着船毎に續々輸入仕候

日本橋通一丁目

白木屋 呉服店 洋服店

通信女學講義錄 第五卷

明治廿三年三月十日發兌

價金卅二錢 全國無郵稅

麴町區富士見町二丁目一番地

女學雜誌社

第二回夏期學校廣告

本年ノ夏期學校ハ來ル七月五日ヨリ同十五日迄十日間東京市芝區白金明治學院ニ於テ開ク演說ハ吾國ニ於テ最有名ナル牧師宣敎師其他基督敎主義ヲ執リ社會樞要ノ地位ニアル人々ニ依賴シ來校スル者ヲシテ悉ク大ナル益ヲ得テ去ラシメンガ爲メ大ニ計畫スル所アリ來校者ノ宿所ハ明治學院寄宿舍及其近傍ニ設ク其滯在中ノ入費ハ一人每ニ十日間金貳圓ニ充タザルベシ滊車滊船賃金ノ割合ハ當時其向ヘ相談中ナレバ他日更ニ報告スベシ來校ノ男女青年諸君ハ六月十五日迄ニ其旨ヲ報セラレヨ夏期學校ニ關スル忠告アラバ受ケ質問アラバ答フベシ諸通信ハ明治學院內夏期學校委員ヘ宛テラレタシ

定價

一册。六錢 郵稅。五厘（但府內無郵稅）

十册。五十八錢 郵稅。五錢（同前）

半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓五十六錢

一年分 二圓六十錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）

同 三回以上 一割引

同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受くべし女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

發行所 東京麴町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

呉服 洋服 白木屋廣告

呉服物及洋服御調への節は多少に不限御用向被仰付度弊店は内外時流の物品を精撰し且外國御注文の品は時日を期して御約定仕諸彦の御服装に一層注意を加へ頗廉價に調進仕候間御愛顧御購求を乞

尚夏物服地及珍柄フラ子ル●セル單物地等着船毎に續々輸入仕候

日本橋通二丁目

白木屋 呉服店 洋服店

通信 女學 講義録 第五巻

明治廿三年三月十日發兌

價金卅二錢 全國無郵稅

麹町區富士見町二丁目一番地

女學雜誌社

第二回夏期學校廣告

本年ノ夏期學校ハ來ル七月五日ヨリ同十五日迄十日間東京市芝區白金明治學院ニ於テ開ク演説ハ吾國ニ於テ最有名ナル牧師宣敎師其他基督敎主義ヲ執リ社會樞要ノ地位ニアル人々ニ依賴シ來校スル者ヲシテ悉ク大ナル益ヲ得テ去ラシメンガ爲メ大ニ計畫スル所アリ來校者ノ宿所ハ明治學院寄宿舍及其近傍ニ設ク其滯在中ノ入費ハ一人毎ニ十日間金貳圓ニ充タザルベシ滊車滊船賃金ノ割合ハ當時其向ヘ相談中ナレバ他日更ニ報告スベシ來校ノ男女青年諸君ハ六月十五日迄ニ其旨ヲ報セラレヨ夏期學校ニ關スル忠告アラバ受ケ質問アラバ答フベシ諸通信ハ明治學院内夏期學校委員ヘ宛テラレタシ

定價

一冊。	六錢	郵稅。五厘（但府内無郵稅）
十冊。	五十八錢	郵稅。五錢（同前）
半年分	一圓四十三錢	府外は 一圓五十六錢
一年分	二圓六十錢	府外は 二圓八十六錢

廣告

一行（廿七字詰）
一回 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受くべし
女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

發行所 東京麹町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐